

故意・錯誤問題への認知科学的ストラテジー

増田

豊

プロローグ

一 サビアウォーフの「言語相対性」の仮説と故意における自己意識的な認知

二 「知覚の理論負荷性」のテーゼと△として見る▽としての故意における認知

三 イメージによる対象の同定と故意における認知

(1) ドブスラフの認知心理学的アプローチ

(2) ロッシュのプロトタイプ論

(3) 記憶モデルとイメージによる対象の同定としてのパターン認知

エピローグ

プロローグ

故意とは構成要件に帰属する事実の認識（さらに故意説であれば不法の認識）であり、同時に構成要件の行為を實現する意思であるとするテーゼは、今日若干の異論もないではないが一般的には承認されているといえるだろう。⁽¹⁾しかしながら、そこで問題とされる認識とは何か、また意思とはいかなる心的作用かということになると決して見解の一致を見出すことはできない。本稿では意思の問題についてはそれはそれとして深い論議が必要であるため主題化されないが、論議を認識の問題、しかも構成要件に帰属する事実の認識の問題に限定しただけでも、それについて統一的な合意を獲得することが極めて困難なほど問題状況は混乱しているように見える。しかも錯誤の問題がこれに加わるとそうした状況は一層複雑な様相を呈することになる。

こうした問題状況を打開し、混乱を鎮めるためには（あるいは新たな、別な意味における混乱を生ぜしめることになるかもしれないが）そもそもいかなる方略が有効であろうか。ひょっとしたら、認識するとは一体どういうことなのかという根源的問題を改めて問い直してみることも、錯誤に陥ってあえいでいる論者達（むろんわたくしもその例外ではない）ということをわたくし自身メタ認知している）を救い出す手立てなのかもしれない。

ところで、刑法における故意および錯誤に関する論議は、通常法律については素人である行為者の認知の問題を対象とするという点において、法律の専門家である裁判官の認知の問題を主題とする法適用論にパラレルに對置されるものである。したがって故意・錯誤問題を、法適用論（および事実認定論）とのパラレルな対応の中で検討することが有意義であることはいうまでもなからう。しかし法共同体の大部分を構成するのは素人であって、専門家はほん

の一握りにすぎない。しかも代表民主制においては、素人である国民の代表者によって法律が制定されるという意味において少なくとも間接的には素人である国民が立法に関与することになるし、また法律（刑法）は一次的には素人である国民に対する「行動規範」として機能するものである。にも拘らず、法理論において素人の認知の問題は、専門家の認知の問題に比べてこれまで果たしてそれほど深く探究されてきたであろうか。むしろ、例えばN・マコーミックも強調しているように、法的推論に関する問題においてさえ素人の認知（一般市民の推論）の問題がより深く探究されるべきではなからうか。

ともあれ、故意および錯誤に関する論議が法律については素人である行為者の「心」の問題を対象とするものであり、そこでは素人がいかにして対象を同定し、法を理解するかという認知の問題が扱われることになるのであれば、本来認知の問題を主題とする「認知論」ならびに「認知心理学」、あるいはそれらと交差する「認知科学」の知見を踏まえて故意・錯誤問題にアプローチし、旧来の刑法学の既成観念にとらわれずに新たな地平に立つて改めて考え直してみることがそうした問題に対処するために有効な方略であることは疑いえないものであろう。

本稿においては、まずサピアアロウの「言語相対性」の仮説をめぐって言語と認知についての問題を考え、故意における認知が言語との関わりを有する認知でなければならないか否かを検討する。次にハンソンらによって展開された「知覚・観察の理論負荷性」のテーゼについて吟味し、故意における認知形式および錯誤に関する旧来の見解を認識論的に批判し、新たな地平に立つて故意・錯誤問題を考え直してみたい。最後にイメージによる対象の同定の問題につき、意味理論・概念論としてのプロトタイプ論や記憶モデル論などを交えて考察し、その成果を踏まえて故意・錯誤問題に対する有効な方略を組み立ててみたいと思う。

(1) 故意を知的要素のみによって構成するものとして、Schmidhäuser, Strafrecht Allgemeiner Teil, 2. Aufl., 1975, S.

391 ff. を参照。

(2) *N. McCormick, Citizens' legal reasoning and its importance for jurisprudence, in: Plenary main papers, The 13th World Congress on Philosophy of Law and Social Philosophy, 1987, 9-25.* (亀本洋訳「市民の法的推論とその法理学にとっての重要性」) マコーミックは「裁判官による「司法的推論」を法的問題の中心的論点とする主張を退け、普通の市民による法的推論の重要性を指摘している。

(3) 認知科学とは何かということについては多くの人が論じているが、ここではノーマンの論文だけを挙げておく。ノーマン(三宅芳男訳)「認知科学とは何か?」(佐伯胖監訳『認知科学の展望』所収)一九八四年、一頁以下参照。

一 サピアールウォーフの「言語相対性」の仮説と故意における自己意識的な認知

シュミットホイザーが「不法意識の現実性と可能性について」と題する論稿において、フライターク・レリンクホーフの見解に依拠して「言語的思考」(*Sprachdenken*)と「事物的思考」(*Sachdenken*)とを区別して以来、故意における認知形式の問題は、言語と認知に関わる基本問題として提起されることになった。

シュミットホイザーによれば、⁽³⁾言語は比喩的に言えば事柄を明晰化したり他人と対話するための心的・身体的な乗り物にすぎないものであり、言語を使用しなくとも人は思考することができ。そうした思考は「事物的思考」と称される。「事物的思考」とは言語に依拠せずに事柄そのものとの関わりで思念することであり、それはイメージを伴った想起に基づき事柄を直接経験することによって遂行されるものである。これに対して「言語的思考」とは思考する者が他者ないしは自らと(たとえ沈黙しながらのものであれ)発話しながら遂行される思考であって、学問上の思考などとはこうした「言語的思考」として特徴づけられている。また「事物的思考」は「言語的思考」よりもその処理

が迅速であり、包括的であつて、「言語的思考」が一つずつ順次に処理することをそうした思考は一気に遂行してしまふ。例えば、迅速な反応を要求される現代の道路交通における対応などは、まさにこうした思考なしには考えられないものである。刑法における故意にとつてもまたこうした「事物思考的意識」(sachgedankliches Bewußtsein)があれば十分であり、したがつて瞬間的に遂行される犯行の場合などにも容易に故意を認定することができる、とするのである。

このようなシュミットホイザーの見解に対してアルトゥール・カウフマンは、⁽⁴⁾フンボルト、ヴィットゲンシュタインそれにサピアに依拠して、⁽⁵⁾言語なしに思考を意識化することは不可能であつて、激情犯のような場合でも行為者は短縮された形態における言語によって思考している、とする異論を提出している。

こうした刑法学における対立は、むしろ言語と認識・思考との関係をいかに理解するかという点に関する言語哲学や文化人類学あるいは認知心理学などにおける基本的対立を反映するものであつて、刑法学においてもそうした論点を抜きにして故意における認知形式の問題を論究することは不可能でさえあるように思われる。ここでは以下に、言語と認知との関係に関するサピアとウォーフの仮説を中心に取り上げ、果たして認識は言語に依存するものであるか否かという問題を考えると同時に、刑法における故意の認知形式はいかなるものでなければならないかということを検討してみよう。

さて、認識は言語に依存するものだ⁽⁶⁾とする見解は、ヘルダーまで遡り、既にフンボルトによつて展開されていたものであり、ドイツ語圏ではその後レオ・ヴァイスベルガーによつて発展させられたが、⁽⁶⁾近年ではアメリカの言語学者であるとともに人類学者でもあつた、サピアとその弟子のウォーフによつてアメリカ・インディアン⁽⁷⁾の言語の研究を通じて主張された「言語相対性の仮説」の中に際立つた形で見出されうるものである。

もつとも「サピアウィットフの仮説」といっても、それらは決して統一的なものではなく、重要な問題について両者は相異なった見解を採っていた。にも拘らず、言語と思考、知覚、文化、現実、世界観との関係に関するサピアとウィットフの理論には、一定の主張が含まれている。すなわち、言語はわれわれ人間にとって単なるコミュニケーションの道具にすぎないのではなく、われわれの思考、知覚、文化、世界観に対して絶大なる影響を与えるものであるとする主張がそこには共通のものとして含まれているのである。⁽⁸⁾

しかしながらしばしば指摘されるところであるが、「サピアウィットフの仮説」には曖昧さと多義性とは付きまわっており、そのためこの仮説については多様な解釈が成立しているということが言語と認知の問題につき一層の混乱を招く原因となっている。例えば、「サピアウィットフの仮説」に関する最もラジカルな解釈によれば、相異なった言語体系は相異なった認知を条件づけるものであるからそれらの認知は相互に \wedge 翻訳不可能 \vee だ、とさえ主張されている。⁽⁹⁾ もつともこうした異なる言語間における \wedge 翻訳不可能性 \vee を主張するラジカルな解釈に対しては、一様に次のような批判が提起されている。すなわち、ある言語から他の言語へと翻訳することが困難とみられるような単語は確かに存在する。しかしそのようなものでも決して翻訳不可能というわけではない。したがってそうした解釈はわれわれの経験に反する、とするのである。⁽¹⁰⁾

そこで今日では、言語と認知に関する「サピアウィットフの仮説」については、次の二つのテーゼがその中に含まれるものとして理解することが一般的になってきている。つまり、まず第一は、 \wedge 言語は認知・思考を決定する \vee とする「強いテーゼ」、すなわち「言語決定論」の立場である。もう一つは、 \wedge 言語は認知・思考に影響を及ぼす \vee とする「弱いテーゼ」、すなわち「狭義の相対性論」の立場である。⁽¹¹⁾

\wedge 認知・思考は言語によって決定される \vee とする「強いテーゼ」は、人間には「前言語的思考」なるものは存在し

ないし、 \wedge 言語なしでは思考は不可能である \vee とする主張を含んでいる。こうした主張は、言語と思考との関係につき「言語的思考」のほかに「前言語的思考」ないしは「事物的思考」なるものを認め、そのような思考こそ認識の真なる源泉であるとする「二元論」を退け、人間の思考の特殊性を記号体系としての言語と不可分的に結びついているその概念的性格に求め、言語と思考とは統一をなしているとする「一元論」の立場を表明するものである⁽¹²⁾。

こうした「一元論」あるいは「言語決定論」の立場に対しては、まず循環論であるとする批判が提起されている。つまり、人間の思考・認知が言語のカテゴリー化に依存するとする見解は、そうした見解自体も一定の言語に依存しているということになるから、言語が思考・認知に依存していないという証拠を提示しなければならないが、それがなされておらず、循環論だとするのである⁽¹³⁾。また動物や幼児でも言語なしに思考・認知しているという事実を説明できないといった批判が通常なされている⁽¹⁴⁾。例えばホーレンシュタインは、「言語決定論」が正しいとすれば、ドラの音とトランペットの音とを前言語的能力で区別できる実験動物はある点で人間よりも優れていることになるし、人間と動物とは全く異なる区別能力を持つものだとすることを認めることになる⁽¹⁵⁾、と批判している。さらにこの論点と関連しているが、最近の認知科学においては \wedge 右脳のな \vee 思考・認知は \wedge 前言語的な \vee ものであり、こうした思考・認知こそ人間の根底にあるものだ、とする異論も提起されている⁽¹⁶⁾。

もっともアダム・シャフのような一元論者も、 \wedge 概念的 \vee 思考に限定してこうした思考を \wedge 言語的な \vee ものであり、人間の思考に固有なものとして特徴づけようとするものであって、そこにおいては極端な一元論が主張されているのではない⁽¹⁷⁾。したがって、本来「思考」というものをいかにとらえるかという問題が「一元論」か「二元論」かという問題に先行しており、そうした対立は人間の「思考」として何を特徴的であると看做するかという問題の中に少なくとも部分的には解消されるように思われる。

また先に言及したように、刑法学・法理論においてはシュミットホイザーが「言語的思考」と「事物的思考」とを区別する「二元論」を採っているのに対して、アルトゥール・カウフマンはこうした見解は狭すぎる言語の概念に依拠しているものだとして「一元論」に近い立場を表明している。そこでは明らかに「一元論」か「二元論」かという問題に先立って「言語」というものを本来いかなるものとしてとらえるかという問題に関して対立がみられる。したがってまた、このような「一元論」と「二元論」との対立は、「言語」の概念をどのようにとらえるかという問題の中にもある程度は解消されることになりそうである。

さらに「一元論」の立場は「言語的思考」を人間に固有なものとしてとらえるのに対し、「二元論」の立場は「前言語的思考」を人間的な思考として位置づけようとしている点で際立った対立を示している。だがそうした対立はある意味で表面的なものにすぎないように思われる。というのは、一元論の立場は動物による感性的な操作に対しては言語的な思考を人間的なものとして際立っているのに対して、二元論の立場はフォン・ノイマン型のコンピュータによる論理的な処理に対しては前言語的な思考を人間的なものとしてとらえているからである。⁽¹⁸⁾

いずれにせよ、言語と思考・認知との関係についてはいまだ十分な説明が為されていない現段階において、また現代の認知科学の知見を尊重する限りにおいて、言語に全面的な優位を与える「強いテーゼ」を直ちに受け容れることには強い疑念が生ずることになる。これに対しは言語は思考・認知に影響を及ぼすとする「弱いテーゼ・開かれたテーゼ」は、言語の持つ多様な機能に着目するならば、差し当たり受け容れられるべきだろうが、そのことは言語と思考・認知との微妙な関係につき更なる探究が必要であるということを表明するものであり、言語と思考との関係に関する考察につき出発点に立っていることを意味しているにすぎない。

こうした論議を踏まえて、刑法学における故意の知的要素としていかなる認知を要求すべきかがわれわれの主題と

して設定されねばならない。刑法学にとっては、 \wedge 言語的 \vee 認知・思考のほかに \wedge 前言語的 \vee 認知・思考なるものがあるか否かということよりも、故意帰責のためにいかなる認知形式を要求すべきかという問題が一層重要だからである。それではいかなる観点からそうした問題にアプローチすべきであろうか。その際、故意帰責にとって決定的な視点を提供するのは「責任主義」およびそれと密接に結びつけられている「行動規範」の概念であろう。すなわち、「責任主義」は \wedge 自律的な自己決定力を有する \vee 「答責的・理性的な人格」に対して不法・責任を問い、また責任はそうした人格に対して向けられている「行動規範」の侵害を前提とするという観点が故意における認知形式を規定することになるであろう。

さらにいえば、ボバーとエクルズも指摘しているように、 \wedge 人間に固有な \vee 「自己意識」(単なる対象意識ではなく反省意識)はボバーのいう「世界3」に属する言語なしには考えられないものであるという点が重要であろう。⁽²⁰⁾つまり、「人格としての人」はそうした「自己意識」ないしは「自己省察」に基づいて「自律的な自己決定」を為しうるものであるからこそ、行動規範によって義務づけられ責任を問いうる存在になると考えられる。⁽²¹⁾それ故、このような「自律的な自己決定」に基づく行動規範の侵害としての責任は、「自己意識」ないしは「自己省察」を伴いうる言語あるいは言語的認知と分かち難く結びつけられているといえよう。

またションシャルも、言語化によって人の「反省意識」が展開されるものであり、「人間は言語を使わなくても考えることができる」とし、しかし「真に考えることができる」とすればそれは言語の賜なのである⁽²²⁾。そして「文化人には、言語なしの正常の思考は不可能なのだ」と述べているが、そうであるならば、責任主義の観点からは自己意識・反省意識を欠いた、幼児や動物にも見られるような単なる \wedge 前言語的 \vee 認知・操作に基づき故意帰責を問うことはできないし、行動規範の概念はそうした「自己省察」の契機を欠いた認知を対象とすることなどできないであろう。

むしろ責任主義の観点からすれば、故意における認知形式は△自律的な自己決定の基礎となる▽「自己意識・反省意識」を伴いうる言語との関わりを有する認知に限定されねばならない。つまり、対象を同定し、言葉（内言語）でこれを「指示」してとらえているという△自己意識的な▽「言語レベル」にまで達している認知が故意には必要であると思われる。さもないと故意帰責は無制限的に肥大化し、刑法学が行動規範の概念および責任主義の原理によって設定した△法治国家的▽限界を不当に撤去してしまう結果を招くことになるであろう。

以上のように主張することは、決して新奇なことではなく、刑法学が故意の知的要素として、たとえ曖昧なものであると批判されているにせよ、また部分的にはあるがいわゆる「意味の認識」を要求してきたという伝統にも適合するものではないかと思われる。すなわち、△言語的な▽「意味の認識」を有する場合にのみ故意帰責を問いうるものであるとするテーゼは、その内容をいかに理解するかという問題がさらに提起されるにせよ、刑法学にとって反駁しえない前提としてとらえられることになるであろう。

むしろここで「言語的な認知」という場合、それは単に対象を記述することや論理的な操作に関わるものとしてだけ理解されるのではなく、さらに感性的なものや具象的なイメージなどと結びつけられた、より△包括的・重疊的・成層的な▽ものとしてとらえられるべきものであろう。したがってまたわれわれが動物と共有している△前言語的・右脳のな▽認知能力ないしは△前言語的な▽要因がこうした△言語的な▽認知にも△成層的な▽形態で深く関わっているということも否定されないし、むしろ高次の（上位層の）△言語的な▽ものと低次の（下位層の）△前言語的な▽ものとの「相互作用」の中で遂行される認知が故意における認知として理解されることになるであろう。その限りで言語以前のものについての、および言語的なものと前言語的なものとの関わりについての一層の探究が必要とされよう。いずれにせよ以上のように理解された認知は、激情犯のような瞬時に処理される行為の場合にも必ずしも見出し

えないものではないと思われる。

- (1) *Freitag-Löringhoff*, Über einige Wesenzüge des Gesprächs, Studium Generale, 1955, S. 549 ff.
- (2) *Schmidhäuser*, Über Aktualität und Potentialität des Unrechtsbewußtseins, in: H. Mayer-Festschrift, 1966, S. 317 ff.; vgl. *Freitag-Löringhoff*, a. a. O., S. 552 ff.
- (3) *Schmidhäuser*, a. a. O., S. 325 ff.; vgl. *ders.*, Strafrecht Allgemeiner Teil, 2. Aufl., 1975, S. 409, 424; *ders.*, Vorsatzbegriff und Begriffsjurisprudenz im Strafrecht, 1968, S. 19.
- (4) *Arthur Kaufmann*, Die Parallelerwertung in der Laiensphäre, 1982, S. 30 f. (上田健一訳・同志社法学第三五巻第一号一三〇頁以下参照)。またサブ・フ・ウ・オーフの仮説に対して好意的な見解として *W. Hassemer*, Tatbestand und Typus, 1968, S. 75 f. Anm. 32; *Schünemann*, Die Funktion des Schuldprinzips im Präventionsstrafrecht, in: Grundfragen des modernen Strafrechtssystems, 1984, 163 ff. を参照。さらにウ・オーフの見解に言及するゲッセルは「言語は概念的思考に影響を及ぼすとしながら、概念は必ずしも言語を前提としないと述べている。例えば、言語を修得していない小児でもある種の因果関係の意味を未発達な仕方ながら理解しうるものだ」と述べている。Gössel, Über die Bedeutung des Irrtums im Strafrecht, 1974, S. 20. これはサビ・フ・ウ・オーフの仮説の弱いテーゼを受け容れることはできむが、強いテーゼには反対だと表明するものであろう。なお、法発見論との関わりで、増田「ネオ・客観的解釈論についてのディ・ア・グ・ノーゼ」法律論叢第五八巻第三号（一九八六年）一三八頁参照。
- (5) Vgl. v. *Kutschera*, Sprachphilosophie, 2. Aufl., 1975, S. 329 ff.
- (6) ヘルダー（木村直司訳）『言語起源論』（一九七二年）、フンボルト（亀山健吉訳）『言語と精神』（一九八四年）、ヴァイス・ベルガー（福本喜之助訳）『言語と精神形成』（一九六九年）参照。
- (7) サビア（泉井久之助訳）『言語』（一九五七年）、ウ・オーフ（池上嘉彦訳）『言語・思考・現実』（一九七八年）、サビア／ウ・オーフ／ヴァイス・ベルガー他著（池上嘉彦訳）『文化人類学と言語学』（一九七〇年）参照。
- (8) ジュリアン・ペン（有馬道子訳）『言語の相対性について』（一九八〇年）参照。ホルノウは「言語相対性の仮説」に「き認識論の普遍妥当要求に対する重要な異議である」と述べている。Bollnow, Philosophie der Erkenntnis, 1970, S. 11.（西村皓、井上担訳）『認識の哲学』（一九七五年）一九頁参照。

- (9) *Schaff, Sprache und Erkenntnis*, 1974, S. 165 ff. アダム・シヤフ (岩淵慶一訳) 『言語と認識』(一九七四年) 二五一頁以下参照。
- (10) *Schaff, a. a. O.*, 165. ジェリッ・ベン (有馬道子訳) 前掲書一六〇頁 (訳者解説) 参照。もともと、J・M・エディはメルロ・ポンティとともに、語の「表現」されている意味ではなく、語の「内在的」「感情的」「実存的」意味、つまり語に「住みついている意味」というものは他の言語に完全に翻訳できないと述べているが、そこではそもそも翻訳するということはどういうことなのか問われることになる。J・M・エディ (滝浦静男訳) 『ことばと意味』(一九八〇年) 一九四頁参照。また、クワインの「翻訳の不確定性原理」については、クワイン (大出晃、宮館恵訳) 『ことばと対象』(一九八四年) 四〇頁以下、一四頁以下参照。
- (11) *Vgl. Schaff, a. a. O.*, S. 61 ff.; *v. Kutschera, a. a. O.*, S. 330; *Gipper, Das Sprachapriori*, 1987, S. 9. 先に挙げた翻訳書の他、コール／スクリプナー (若井邦夫訳) 『文化と思考』(一九八二年) 五四頁以下、ライアンズ (近藤達夫訳) 『言語と言語学』(一九八七年) 三三六頁以下参照。
- (12) *Vgl. Schaff, a. a. O.*, S. 118 ff.
- (13) *Vgl. Schaff, a. a. O.*, S. 90 f. 村田孝次「言語と認知」奈良女子大学文学部研究年報二五卷(一九八二年)三頁、唐須教光『文化の言語学』(一九八八年) 一三九頁参照。
- (14) 酒田英夫、安西祐一郎、甘利俊一『脳科学の現在』(一九八七年) 七二頁以下、一八三頁以下参照。
- (15) ホーレンシタイン (村田純一、柴田正良、佐藤康邦、谷徹訳) 『認知と言語』(一九八四年) 一一頁以下参照。 *Vgl. Schaff, a. a. O.*, S. 116 f.
- (16) 渡辺慧『知るということー認識学序説ー』認知科学選書八(一九八六年) 一四七頁以下参照。なお、右脳と左脳の機能分化と統合については、スペリー (須田勇、足立千鶴子訳) 『融合する心と脳』(一九八五年)、特に八一頁以下参照。また山鳥重『脳からみた心』(一九八五年) 一九七頁以下参照。スペリーは、従来無視され劣位半球と考えられていた右脳に高次の認知能力が備わっており、また限られてはいるが右脳も言語能力を有している、と指摘した。また、ポパー／エクルズ (大村裕、西脇与作訳) 『自我と脳(下)』(一九八六年) 四三九頁以下、B・B・ブラウン (橋口英俊、松浪克文、山河宏、三宅篤子訳) 『スーパーマインド』(一九八三年) 一六五頁以下、杉下守弘編『脳から心へ』(一九八八年)、クック (久保田競、桜井芳男、大石高生、山下晶子訳) 『ブレインコード』(一九八八年) 一七七頁以下参照。

- (17) Schaff, a.a.O., S. 193.
- (18) 例えば、シャフは「言語的思考と、完全に失語症的な人間、乳児、チンパンジー、それにアミーバーなどの定位との相違を否定することはばかげたことであろう」とし、言語的思考と結びついているようなものこそ特殊人間的であると主張してゐる。vgl. Schaff, a.a.O., S. 117f.
- (19) 渡辺慧、前掲書、一四八頁以下参照。
- (20) ポパー／エクルズ、前掲書、六三〇頁以下参照。vgl. Dreher, Die Willensfreiheit, 1987, 269 ff. ポパーは、「完全な意識は、言語によって明確化される抽象的な理論をもつことに依存する」(六三〇頁)し、「われわれが自我の完全な意識と呼ぶものを動物はもてない」(六四二頁)と述べ、さらに「真の批判というもの―考え、理論の批判―は言語によってのみ生じる」(六四三頁)と主張し、エクルズも「言語の発達に平行して、自己意識がきわめて初期の進化段階に次第に現われてきた」(七九九頁)と主張している。また、エクルズ(大村裕、小野武年訳)『脳―その構造と働き―第二版』(一九七九年)二二六頁以下参照。なお、劣位半球(右脳)には自己意識はないとするエクルズ(四四九頁以下、五四三頁以下)の主張に対する批判として、ヘップ(白井常、鹿取廣人、平野俊二、鳥居修晃、金城辰夫訳)『心について』(一九八七年)九四頁以下参照。
- (21) Vgl. Bauermann, Zweckrationalität und Strafrecht, 1987, S. 74 ff.
- (22) ショッシャル(吉倉範光訳)『言語と思考』(一九七二年)七四頁以下、一二四、一二六頁。

二 「知覚の理論負荷性」のテーゼと△として見る▽としての故意における認知

刑法解釈学における伝統的な理論によれば、故意における認知形式として少なくともいわれる「記述的要素」の場合には構成要件に帰属する「客観的事実」を△感覚を通じて知覚すること▽が必要であり、これに対していわゆる「規範的要素」の場合にはさらにその△意味の精神的な理解▽が必要である、とされてきた。しかしこうした区別お

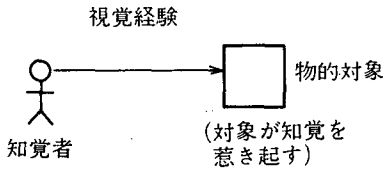


図1 (素朴实在論)

よびその前提自体の妥当性がいまや疑問視されねばならないように思われる。ここでは以下に、客観的事実を「感覚を通じて知覚すること」とは一体いかなる性質を有する知的作業であるかを探究することによって故意における認知形式の問題にアプローチすると同時に、刑法における錯誤の概念についても考察してみよう。

さて、感覚的知覚とは客観的に「物的対象」を感覚によってじかにとらえることであろうか、あるいは感覚によって直接与えられたもの、すなわち「感覚与件」(sense-data)⁽¹⁾を単に受容することに尽きるものであるか。これらの見解は人間とは独立した實在的な「物理的対象」の世界ないしは實在的な「現象」の世界があるということを前提として、いずれにせよそこから得られた情報は知覚する主体から一応独立しており、また誰にとっても原則的には同種のものであるという意味において客観的であるとする点に共通の特徴を有するものであろう。とりわけ前者の立場はその素朴さの故に刑法学においても殊のほか容易に見出しうるものである。

例えば、クラマーはあの権威あるシェンケリシュレーダーの刑法コンメンタールにおいて、「故意は行為者意識における事実を特徴づける要素の『鏡像』と称されうるだろう」と述べ、さらに「記述的」構成要件要素については「純然たる事実」の認識があれば故意にとつては十分であるとしているが、これは故意における認知を實在する外界の「模写」であると規定するものであって、いわゆる「素朴实在論、直接的实在論、通俗的实在論」(naïver Realismus, naïve realism, direct realism, common sense realism 図1参照)⁽³⁾の立場を限りなく素朴に表明するものであるか、せいぜいのところ「感覚与件論」の立場に通ずるかのいずれかであろう。またイエシエックが通俗の見解に何らの批判的省察を加えることなしに、錯誤を「意識と現実との不一致」として規定しているのも同様であろう(図2参照)⁽⁴⁾。

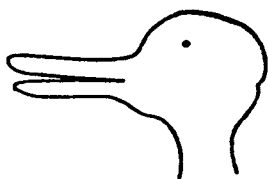


図3 (アヒル／ウサギ)

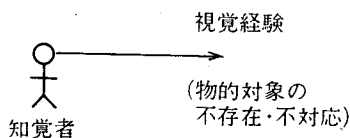


図2 (通俗的錯誤論)

しかしながら、もし仮に知覚というものがそもそも何意味を担った√知覚でしかありえないものであるとするならば、これまで刑法学において前提とされてきた「感覚的な知覚」と「精神的な理解」との厳密な区別ならびにこうした基準によってなされる∧記述的√構成要件要素と∧規範的√構成要件要素との区別も否定されねばならないことになるであろうし、さらにには故意における認知を實在の「鏡像」ないしは「模写」と規定し、錯誤を∧主観的な認識と客観的な實在との不一致√と規定する通俗的な故意・錯誤論も痛烈な打撃を受けることになるのは明らかであろう。したがって、こうした視点からヴィットゲンシュタインの後期哲学の影響のもとにハンソンによって唱えられ、さらにクーンやトゥールミンそれにファイヤアーベントラによって発展させられた「知覚・観察の理論負荷性」(theory-ladenness)のテーゼを参照することによって、われわれは刑法における故意の認知形式および錯誤問題を考える上で重要な示唆と新たな地平とをそこから獲得することができるとは考えられない。以下ではこのテーゼをめぐって故意・錯誤問題にアプローチしてみたい。

さて、ハンソンにとって「見ることは目を向ける以上のものがある」⁽⁵⁾。例えば、ヴィットゲンシュタインも取り上げているヤストロウの有名なあの「アヒル／ウサギ」の反転図(図3)は、これをウサギの頭とも、あるいはアヒルの頭とも見ることができる。全く同一の絵が「見方」あるいは「アスペクト」によってアヒルに見えたり、ウサギに見えたりするのである。すなわち、われわれは、その絵がアヒルに見えるときにはそれをアヒル∧として見る√ (Sehen als, seeing as) のであり、ウサギに見るときにはそれをウサギ∧として見る√なのである。

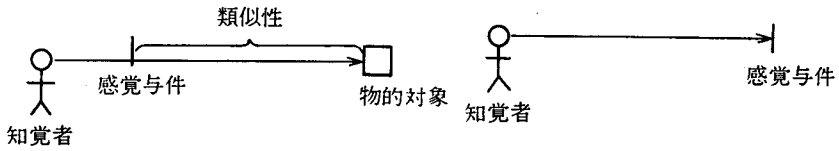


図5（代表説、間接的实在論）

図4（現象主義）

この△として見る▽ことあるいはヴィットゲンシュタインのいう△アスペクトの認知▽は、ヴィットゲンシュタインによれば「解釈するようにこれを見ている」のであり、「半ば視覚体験、半ば思考である」ということになる。⁽⁷⁾

ハンソンは、この△として見る▽という認知あるいは△アスペクトの認知▽に関するヴィットゲンシュタインの洞察をさらに発展させ、むしろ「見ることはまさしく見ることにほかならない。われわれは二つの事柄——視覚的に反応し、それから考える——を行なっているわけではない」とし、△見る▽ことはほとんどすべて、△として見る▽ことをその根底に含んでおり、解釈を見ることが成分としてとらえている。そして見ることにについてのこうした見解を知覚事例全体につき一般化することによってかれは、見ることにさらには知覚というものは感覚を通して「生の事実」、「裸の、意味を欠いたデータ」を単に中立的に受容するものだととしてとらえ、「現象主義」(Phänomenalismus, phenomenism 図4参照)の形であれ「科学的实在論、間接的・反省的实在論」(図5参照)の形であれ、⁽⁸⁾こうして知覚されたデータを知識の基盤と看做す「論理実証主義」ないしは「論理経験主義」の認識論上の立場に痛烈な攻撃を仕掛けたのである。

すなわち、われわれの知識や信念などがわれわれの知覚に決定的な影響を及ぼすものであるとするならば、ある科学者が依拠している科学「理論」はかれの「観察」にも同様に決定的な影響を与えずにはいない、ということになるのである。このように理論が観察事実・データを左右するものであるとすれば、そうした観察事実・データによって理論を構築したり、あるい

は事実・データによって理論を「検証」あるいは「反証」したりすることも無意味なことである、という結論に至ることになる。

もっともこのような△相対主義的・反實在論的な△認識論によって展開された「理論負荷性」のテーゼを理論が事実・データを完全に創造し、何が知覚されるかは理論だけによって決定されとする主張であると理解するならば、それは行き過ぎた主張であらう。アヒル／ウサギの反転図の場合にも、「見方」によってアヒルにもウサギにも見えるが、犬に見えるわけではない。なるほど知覚は対象があるがまさに受容することではないけれども、他方で理論ないしは知識によってだけ知覚対象が創設されるわけではない。⁽¹⁰⁾むしろ知覚は理論（知識）と感覚器官への外界の作用との「相互作用」の産物であらう。したがって「知覚の理論負荷性」のテーゼは、△理論が知覚・観察を完全に決定する△という意味における「強いテーゼ」として理解される限りにおいては、サピアロウの仮説の「強いテーゼ」と同様退けられるべきではなからうか。だがそれが△知覚・観察は理論に依存し、理論は知覚・観察に影響を及ぼす△という意味における「弱いテーゼ」の形をとる場合には受け容れられるべきものであると思われる。

したがってまた、クーンやファイヤアーベントによって展開された旧い理論（旧いパラダイム）と新しい理論（新しいパラダイム）との「共約不可能性」（incommensurability）のテーゼも問題視されねばならない。「共約不可能性」（通約不可能性）のテーゼ⁽¹¹⁾というのは、異なる理論相互においては準拠している枠組^{パラダイム}が異なり、非連続的であるため、たとえ同一の表現が使用されていても意味および指示対象は同一ではありえないとするものである。さらにそれによれば、異なる理論、異なるパラダイムの間では相互に用語を翻訳することも、また対話することさえ不可能であるとする結論に行き着くことになるであらう。しかしながら、例えば刑法理論に関する因果的行為論者と目的的行為論者とが故意（あるいは構成要件、違法性など）という同一の用語を使用している場合に、確かにその内容は異

なっている⁽¹²⁾。けれども、かれらの間で對話が絶対的に不可能だということは言い過ぎであろう。したがってせいぜい△共約困難な▽場合があるとする程度までそうしたテーゼは緩和されるべきであろう。

いずれにせよ以上のように、△として見る▽ことが△見る▽ことに内在し、△見る▽ことのなかに△理解する▽ことがその構造的契機として含まれているとすれば、先にも指摘したように「純粋な事実を感覺的に知覚すること」と「意味を精神的に理解すること」とを区別する刑法学における前提も反駁されることになるだろう。このことはまた刑法における故意に関わるいくつかの事例を検討することによっても明らかにになる。

例えば、文書偽造罪において△証明の用に供し、かつ適している▽という「意味」を理解していることが行為者に故意を認めるためには必要であるとされる⁽¹³⁾。その際、紙に書かれたインクの染みを「知覚」するだけでは故意を認めるためには十分でないともいわれる。しかしインクの染みをインクの染み△として▽知覚することも△有意味な▽知覚にはかならない。というのは、インクや染みという「概念」ないしはその「意味」を知っているからこそ紙のうえにあるものをインクの染み△として▽見るからである（もっともこのレベルにおける意味の認識では故意にとって不十分だということは自明である）。紙やインク（の概念）を知らない未開人は、紙を紙△として▽あるいはインクをインク△として▽認知することさえできないであろう。また、殺人罪における「人」を知覚する場合にも、心臓は動いているがいわゆる脳死状態にある者を「人」であると判定すべきか否かというような限界的事例においてのみ「意味の理解」が行なわれるのではなく、きわめて単純な事例において、例えば前方に拡がる外界の中からある対象を「人」として分節化し、知覚することなども、やはり「人」についての日常言語的「意味」の理解を前提として初めて可能であるといえよう。また単なる△見る▽と△として見る▽とが区別されるとしても、いずれにせよ刑法の故意帰責にとっては△として見る▽ないしは△として認知する▽を含んでいる知覚、すなわち△有意味な▽知覚ないしは

△概念負荷的なV知覚が必要とされることになろう。むしろいかなるレベルにおける△として見るVを故意における認知として要求すべきかという問題が、「規範の規制目的」との関連でさらに提起されることになる。

ところで、ハンソンは、△として見るVにはさらに△ことを見るV (seeing that) が含まれていると主張する。⁽¹⁴⁾

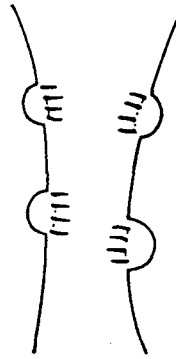


図6 (熊?)

るVのである。⁽¹⁵⁾ つまり、あるものがあるものとして見るためには、あるものを成り立たせている事情ないし状況について

の「知識」が必要であるということになる。

このような△ことを見るVという成分には事柄の「傾性」(Disposition, dispositionelle Eigenschaft)を理解することが含まれているように思われる。⁽¹⁶⁾ 「傾性」というのは「顕在的な性質」(manifeste Eigenschaft)に對置さ

れる「潜在的性質」のことであって、一定の条件が充足された場合に顕在化する傾向、素質、能力などのことである。

そしてそれは、「反事実条件法」によって示されることになる。例えば、砂糖の「水溶性」という「傾性」は「もし砂糖を水の中に入れるならば、溶けるであろう」という「反事実条件法」によって表現されることになるし、「泳げる」というある犬の「傾性」は「もしその犬を川に投げ込むならば、泳ぐだろう」という反事実条件法によって言い表わされることになる。

こうした「傾性」についての「知識」はわれわれが対象を同定する際に不可欠のものとして関わっているように思

われる。例えば、箱の脇に動いている（鼠の）尻尾を見ただけでわれわれは直ちにその対象を鼠として同定する。あるいは顔は見えないが木陰に二本足でたっている対象をわれわれは直ちに人として同定する。さらには暗闇のなかを走行している自動車を見ただけで運転席で動いているものをわれわれは直ちに人であると同定する。これらの場合、「もし箱をどかすならば鼠そのものを見ることができよう」とし、「もし木陰の裏に回れば、人を確認できよう」とし、さらに「もしライトで運転席を照らせば、人を確認することができよう」という反事実条件法で表現される「傾性」が問題となっており、多かれ少なかれ「傾性」についての「知識」に基づき「イメージ」を喚起してわれわれは対象を同定している。しかもこうした事例は「見る」として特殊事例などではない。しかしこのようにいうと「顕在的性質」を見る場合にこそ本来的な意味で「見る」に値するものだという反論が予想されるだろう。だがたとえ鼠や人を正面から見たとしても、われわれはその鼠や人を構成する個々の部分の「顕性」のすべてをありのままに見ているわけではない。例えば、正面から見れば、四つんばいになっているその鼠の腹は見えないであらうし、人の背中は見えないであらう。にも拘らず「相互主観的」な知識に規定された目で見ているわれわれは、その対象を直ちに鼠として、あるいは人として同定し、知覚する。われわれはここでは「アスペクト」によってまさに「パターン」を認知しているのである。また、例えば鼠は「鼠色」をしているという「明示的な性質」も一定の条件で見た場合に（例えば明るいところで正常な目を持つ人が見た場合に）、そのような性質を示すのであって「顕性」と「傾性」との区別は相対的なものであり、むしろすべての性質は「傾性」だともいえそうである。

こうした「傾性」を理解し対象を同定するということは、刑法における故意の認知形式としても極めて重要であると思われる。例えば、スリが被害者の内ポケットから財布をすり盗る場合など、スリは財布をじかに見ているわけではないが、「ポケットの中を見れば、財布があるだろう」という「ことを見ている」のであり、「傾性」を理解し認知

しているのである。また暗闇の中を走行する自動車の運転席に目がけて機関銃を発砲する場合、たとえ運転席に人がいることをじかに見ていなくとも、「運転席をライトで照らせば、人を確認できるであろう」という「ことを見ている」のであり、「傾性」を理解し「イメージ」を喚起して認知しているといえよう。同様のことは、離隔犯や間接正犯の場合には一層妥当する。例えば、毒物を他者に郵送する場合など、行為者は決して他者を直接知覚しているのではなく、せいぜい他者の存在とその毒の服用に関する「傾性」を認知し、自己の行為の意味を認知することになるからである。

さらに結果犯の場合には、結果の認識・予見が故意の内容として当然必要とされているが、結果自体は行為終了後に、つまり行為時から見れば将来において生ずるものであるから、行為者は「素朴實在論」の意味において入実在する√結果をじかに見ていたのではなく、また「知覚の因果説」(causal theory of perception)⁽¹⁷⁾の意味において実在する結果から入惹き起された√現象としての「知覚像」を見るのではなく、さらに「感覚与件論者」が考えるような入純粹に観察可能な√結果の「感覚与件」を見ていたのではなく、「そうした行為を行なえば、結果が発生するであろう」という当該行為の「傾性」、入コンヴェンショナルな√「意味」を理解し、認知し、志向しているのであり、そうした行為を行なえば結果が生ずるであろうという「ことを見る」のである。そこで例えば、ピストルなど全く知らない未開人が他者に向かって初めて手にするピストルの引金を引いたとしても、かれには自己の行為の「傾性」についての知識(意味理解、意味志向)がないため殺人の故意を認めることはできない(たとえその未開人が引金を引く際呪いをかけ、したがって他者の死を確信していたとしても)。

以上の考察から、わたくしは錯誤というものを「対象レベル」で見えるならば、決して入主観的な認識と客観的な実在との不一致・対応√としてではなく、入相互主観的に適用されるべき意味の不適用、あるいは規準となる相互主

観的な意味の無理解、ないしはそうした意味と行為者の理解している意味との不一致 \vee として規定してみたいと思う。その際「意味の適用に関する錯誤」と「意味そのものに関する錯誤」とを区別することが有意義である。例えば、他者の傘を自己の傘と勘違いして持ち去るような場合には、物の「他人性という意味」を当該対象に適用していないため、「意味の適用」に関する錯誤が認められる。これに対して他者と共有している財物は他人の物ではないと思ひ、当該財物を損壊するような場合には、物の「他人性」という「意味に関する錯誤」が認められる。もつともいずれの錯誤も意味に関わっており、「客観的實在」との対応関係によって規定されるものではない。このテーゼを錯誤に関する若干の事例との関わりでもう少し詳しく説明してみよう。

例えば、暗闇で人を熊と誤認して、人に向けて銃を発砲してしまったという単純な事例（意味の適用に関する錯誤）においては、行為者は確かに人についての意味（日常言語的な規則）そのものを誤解しているのではないが、そうした意味を対象に適用せずに認知した点に錯誤が認められる。つまり、その対象に近づく明いところで正常な人間が見れば「人」を確認できるであろうという「傾性」を誤解し、対象に熊（人間以外の動物）の意味を適用して認知したため、殺人の故意が否定されることになるのである。そこでは \wedge われわれによって相互主観的に適用されるべき人の意味 \vee と \wedge 行為者の認知・適用した熊の意味 \vee との不一致が問題とされるのであり、「客観的實在」そのものとの不一致・不対応が錯誤として規定されるものではない。その限りで錯誤というものは \wedge 相対的な \vee ものである。錯誤が相対的なものだということは、同一の対象につき複数の意味（使用規則）が認められる場合にはより一層明らかとなる。

例えば、あの有名な「タヌキ・ムジナ事件」（大判大正一四・六・九刑集四卷三七八頁）では、行為者は日常言語の意味に従って当該対象をムジナと同定した。しかもその当時の日常言語の意味においてはムジナはタヌキとは別物

であるそうだから、行為者がムジナはタヌキではないと思ったことに、少なくとも日常言語的意味のレベルにおいては錯誤など全く認められない。ところが動物学的規則によればムジナもタヌキの一種である。そこで動物学者によって構成される専門家集団において相互主観的に承認されている意味と行為者が認知したところの、日常的な生活世界において相互主観的に妥当している意味とを比較した場合に初めて錯誤の問題が生ずることになるのである。したがってこの場合に錯誤が存するか否かは、「客観的実在」との不对応といった \wedge 絶対的な \vee ものによってではなく、いかなる意味(いかなる生活形式、いかなる言語ゲーム)を基準とするかによってまさに \wedge 相対的に \vee 決定されることになるであらう。

また禁止の錯誤においては、例えば「人を殺してはならない」といった相互主観的に妥当している \wedge 語用論的・評価的・指令的 \vee 意味 (Präskriptiver Sinn) を行為者が理解していないこと、あるいはそうした意味と行為者の理解している \wedge 語用論的・評価的・指令的 \vee 意味との不一致が錯誤として理解されるものであり、そこでも錯誤は実在との不对応として規定されるべきではない。

以上のことと関連してさらに次のことが帰結される。先に指摘したように、故意は事後に成立する結果を認識することではありえないし、事後に成立する因果の経過を対象とするものでもありえない。したがって、故意は事後に成立する結果および因果の経過によって影響されることはないし、行為者の認識したことは異なる結果ないしは因果の経過によって \wedge 既遂 \vee 処罰が阻却されるとしても、 \wedge 故意そのものの \vee が阻却されることはありえない。そこには錯誤の問題など生じない⁽¹⁸⁾。そこに錯誤の問題を見出すのは、 \wedge 主観的認識と客観的実在との不一致 \vee を錯誤と看做す「通俗的見解」の帰結であらうが、そもそも誰にも直接認識しえない未来の事柄(実在)と行為者の認識との不一致を錯誤とすることは、まさに錯誤を論ずる者が犯している錯誤(メタ錯誤)にはかならない。いわゆる因果関係の錯

誤（因果関係の齟齬・逸脱）もこうした前提に立つ限り錯誤論の問題ではない。固有の意味における因果関係の錯誤の問題は、むしろ先に挙げた「未聞人」の事例のような場合、つまり因果関係についてのコンヴェンショナルな意味を理解していないか、あるいは誤解しているような場合にのみ認められるであらう。⁽¹⁹⁾

さらに錯誤の問題は、行為後の裁判における（判断者の）観点から、すなわち「メタレベル」の観点からも考察されるべきである。裁判官（錯誤を認定する者）は、かれの面前で遂行された犯罪行為について判断するわけではないし、またタイムマシンを使って過去に遡って事件の現場を直接知覚・観察するわけでもない。われわれは空間の中を移動することはできるが、時間の中を移動することなどできない。したがって裁判官は、常に過去の事実・出来事について「認定」、より正確には「帰属」(Zuschreiben)することを課題とするのである。⁽²⁰⁾過去の事実はいささく直接的に知覚・観察しえない \vee ということを特徴とするものであって、直接知覚・観察しうるようにみえる証拠を通じて間接的に \vee 推認されるにすぎないものであり、そうした事実に関する「言明」(Aussage, statement)の真偽は「論証」(Argumentation)されるべきものである。⁽²¹⁾

いずれにせよ、このように裁判官によって \wedge コンヴェンショナル \vee に推理され、 \wedge 論証を通じて \vee 「帰属」される過去の事実に関する「言明」の真偽判断は、客観的な実在そのものに関する認定ではありえない。他方行為者の認識もそれが過去のものであるというだけでなくまさに \wedge 内心的な \vee ものでもあるため、裁判官（他者）には \wedge 直接知覚・観察しえない \vee ものであり、ただ一定の認識内容を間接的に証拠によってコンヴェンショナルに行行為者に「帰属」しうるだけである。そうであるならば、こうしたメタレベルの観点からも錯誤を \wedge 主観的な認識（心理的事実）と客観的な実在との不一致 \vee と規定する通俗的な見解は退けられるべきであらう。クレーンが通俗的見解を退け、錯誤を \wedge 判断者によって受容された言明（命題）と判断者が行為者に帰属させた言明（命題）との不一致 \vee （言語的対象の

不一致)として理解していることも以上のような観点を顧慮するならば納得しえないものでもない。⁽²²⁾

(1) 「感覚与件」(sense-data)はムーア、ラッセルによって導入された術語であるが、その意味は論者によって必ずしも同一ではない。ラッセルにとってそれは、感覚において直接経験されるものであり、具体的には色・音・臭気・硬さ・粗さなどのようなものである。その際、このような「感覚与件」とそれを直接意識・経験する「感覚」とが区別されている。つまり感覚与件は感覚されるもの(内容)であり、感覚は感覚すること(作用)である。さらに感覚与件は実際に感覚されるときに与えられるものであるが、実際に感覚されていないときにも感覚与件に対応する「感性体」(sensibilia)なるものが仮定される。ラッセル(中村秀吉訳)『入新訳哲学入門』(一九六四年)一二頁参照。

(2) Schönke/Schröder/Cramer, Strafrechtbuch Kommentar, 23. Aufl., 1988, S. 209.

(3) 「素朴實在論」によれば、事物(物的対象)は知覚する主体から独立して實在しており、主体はそうした事物を感覚によってじかにありのまま知覚するものであって、知覚された事物に関する属性は事物そのものに帰属することになる。その際、厳密には \wedge 存在論上の \vee 實在論と \wedge 認識論上の \vee 實在論とが区別されねばならない。つまり、われわれの経験から独立して物的対象(物)自体が存在するとする見解が \wedge 存在論上の \vee 實在論であり、そうした物的対象(物)自体を知覚しうるとする見解が \wedge 認識論上の \vee 實在論である。素朴實在論はこの両者の意味における實在論を含んでいる。また観念論も、物的対象(物)自体は存在しないとする \wedge 存在論上の観念論 \vee (例えばバークリー)と認識しうるのは現象(感覚与件、知覚像、観念)であって物的対象(物)自体は存在するとしても認識しえないとする \wedge 認識論上の観念論 \vee (例えばカント)とが区別される。なお、實在論には、外界の物的対象を直接認識しうるとする素朴實在論に対して、物自体は直接知覚しえないが知覚像(観念、現象、感覚与件)を経験することを通じて間接的に認識されうる、とする \wedge 間接的な \vee 實在論がある。例えば、ロックの「代表的實在論」(代表説、記号説)もこのような \wedge 間接的な \vee 實在論である。ロックは、物の存在を信じ、心に直接現われる観念は外界の物の「記号」あるいは「代表」であると考えた。その際、物に固有な「第一性質」(大きさ、重さ、形など)と物には本来備わっていない「第二性質」(色、匂い、味など)とが区別され、両者についての観念(現象)とも物から惹き起こされるが、「第一性質」の観念は物と「類似」して、という点が強調される。vgl. v. Kutschera, Grundfragen der Erkenntnistheorie, 1982, S. 151 ff.; see Searle, Intentionality, 1983, 57 ff. 素朴實在論、通俗的錯誤論、現象主義、代表説に関する本文の図はサールの著書より借用。一定の変更を加えたものである。

(4) Jescheck, Lehrbuch des Strafrechts Allgemeiner Teil, 3. Aufl., 1978, S. 246.

- (5) ハンソン(村上陽一郎訳)『科学的発見のパターン』(一九八六年)一一頁以下、同(野家啓一、渡辺博訳)『知覚と発見(上)』(一九八二年)九五頁以下参照。
- (6) *Wittgenstein, Philosophische Untersuchungen*, 1977, S. 308 ff. (藤本隆志訳『哲学探究』一九七六年、三八四頁以下参照)。
- (7) *Wittgenstein, a. a. O.*, S. 314. なお、黒田亘「志向性の文法」哲学雑誌第一〇〇巻第七二号(一九八五年)一七七頁以下、野矢茂樹「 \wedge ……として見る \vee の文法」理想六三二号(一九八六年)一五〇頁以下参照。
- (8) ハンソン、前掲書、一四一頁以下、二〇六頁参照。なお、アヒル/ウサギの反転図の場合、すでに入来(受容)刺激が同一ではないとする主張については、廣松渉「AI問題についての偶感」哲学四号(一九八八年)一七八頁参照。また、神経心理学の観点から、見ることは「意味」に依存し、能動的な神経過程の働きがこれに関与しており、単なる視覚刺激の再構成による受動的な過程ではないとする見解について、山鳥重「脳からみた心」一一三頁参照。
- (9) 初期論理実証主義の認識論であり、實在論に對置される「現象主義」(現象論)は、いわば洗練された觀念論であつて「存在する」ということは知覚することである」とする觀念論者バークリーの言葉は、「存在する」ということは知覚可能であるということである」というように修正される)、感覚与件だけが直接知覚されるものであり、事物(物的対象)に関する言明はすべて感覚与件に関する言明に翻訳され、「還元」される、と主張する。つまり、もし仮に物的対象があるととしても、それは感覚与件によって「構成」される。また、現実的な感覚経験のみならず、可能的な感覚経験も考慮され、知覚されなくとも一定の条件が揃えば知覚されるだろうという傾性的な説明が世界に關してなされることになる。そこではJ・Sミルの「事物は感覚の永続的な可能性である」という言葉が妥当する。また感覚与件を直接経験することとそこから物的対象を推理的に構成することが区別されるため、認知は感覚与件を受動的に経験する過程とそれを能動的に解釈する過程とに分離されることになる。vgl. v. Kutschera, a. a. O., S. 223 ff. このように感覚与件論は現象主義の形で展開されたが、例えばラッセルやエイヤーなどに見られるように、最終的には現象主義は放棄され、實在論が主張された。例えばラッセルは、感覚与件をその背後にある物的対象の「記号」と看做し、感覚与件に対応する物的対象が實在するということを本能的信念に求めた。したがってむしろこれは實在論といつても物的対象をじかに知覚しうるとする素朴實在論ではなく、感覚与件を媒介にする實在論である。ラッセル、前掲書、一一頁以下、エイヤー(吉田夏彦訳)『言語・真理・論理』(一九五五年)、同(竹尾治一郎訳)『哲学の中心問題』(一九七六年)一六八頁以下、同(神野慧一郎訳)『知識の哲学』(一九八一年)

一六〇頁以下、さらに反實在論の立場からダメット（藤田晋吾訳）『真理という謎』（一九八六年）九三頁以下参照。いずれにせよ感覚与件論では、例のアヒル／ウサギの反転図の場合に、アヒルを見ていようとウサギを見ていようと感覚与件は同じ（類似）ではあるが、解釈が異なっているのだ、ということになる。

- (10) H・I・ブラウン（野家啓一、伊藤春樹訳）『科学論序説』（一九八五年）一三七頁以下参照。またポバーもエクルズとの共著では、感覚データ（感覚与件）は存在しないし、むしろ、感覚された世界から入ってくる挑戦があり、それが大脳やわれわれ自身を働かせ、それを解釈させようとするものであり、多くの人が感覚データと考えているものは、実際には非常に精巧な過程の結果であり、何ものもわれわれに直接に八与えられてゐるのではなく、知覚とは、感覚に到達する刺激、感覚の解釈装置、そして大脳構造、それらの間の相互作用を含んだ多くの段階の結果としてのみ成立する、と述べている。ポバー／エクルズ『自我と脳（下）』六一六頁参照。

- (11) クーン（中山茂訳）『科学革命の構造』（一九七一年）、ファイヤアーベント（村上陽一郎、渡辺博訳）『方法への挑戦』（一九八一年）、また村上陽一郎『歴史としての科学』（一九八三年）七八頁以下参照。なお、強い相対主義に対する批判として、加藤尚武『二一世紀への知的戦略』（一九八七年）四頁以下、藤川吉美『科学哲学概論』（一九八六年）一二二頁以下参照。

- (12) 例えばツィーゲルトは、目的的行為論によって刑法学の「パラダイムの転換」が遂行され、不法、責任といった体系カテゴリーのモデルにつき根本的な変更がもたらされた、と指摘している。Ziegert, Vorsatz, Schuld und Vorverschulden, 1987, S. 13.

- (13) 増田「使用規制の錯誤と指示対象の錯誤——錯誤問題への意味理論的アプローチ」法律論叢第六〇巻第二・三合併号（一九八七年）、四四五—四五二頁参照。

- (14) ハンソン、前掲書、一六七頁以下、同『科学的発見のパターン』四一頁以下参照。なお、そこでの論議は「見る」という視覚事象を中心に論議が展開されているが、むしろそうした論議は原則的に感覚知覚全般に一般化しうるものである。その際、諸感覚情報は統合され記憶と照合されて知覚が実現されることになるが、その統合体は全情報が単純に加算されたものではなく、統一的なものとして八変換／されることになる。山鳥重、前掲書、一三九頁参照。

- (15) ハンソン、前掲書、四二—三頁、同『知覚と発見』一八一頁以下参照。

- (16) 増田「曖昧な法概念のアナトミア」法の理論七号（一九八六年）一一〇—一二二頁参照。vgl. Siegmüller, Probleme

und Resultate der Wissenschaftstheorie und Analytischen Philosophie, Band II, Theorie und Erfahrung, Teil B, 1970, S. 213 ff.; *Opp.*, Methodologie der Sozialwissenschaften, 2. Aufl., 1976, S. 203 ff.; v. *Kutschera*, a. a. O., S. 104 ff.; *Ryle*, The Concept of Mind, 1980, 112-147. (坂本百大「宮下治子」服部裕幸訳『心の概念』一九八七年、一六一頁以下参照); *E. v. Savigny*, Die Philosophie der normalen Sprache, 1974, 103 ff.; *Kindhäuser*, Intentionale Handlung, 1980, S. 98 ff.; *ders.*, Rohe Tatsachen und normative Tatbestandsmerkmale, Jura 1984, S. 475 f.; *W. Hassemer*, Einführung in die Grundlagen des Strafrechts, 1981, S. 168 ff.; *Koch/Rußmann*, Juristische Begründungslehre, 1982, S. 280 ff.; *Schünemann*, Die Funktion des Schuldprinzips im Präventionsstrafrecht, in: Grundlagen des modernen Strafrechtssystems, S. 183; *Mylonopoulos*, Das Verhältnis von Vorsatz und Fahrlässigkeit und der Grundsatz in dubio pro reo, ZStW 99 (1987), 687 ff. マーテン(雨宮民雄訳)『事実・虚構・予言』(一九八七年)七九頁以下参照。

- (17) 「知覚の因果説」とは外界の物的対象(物)が知覚の原因となり、これを惹き起すとする見解である。つまり、そこでは物的対象自体はわれわれが知覚するような色や匂いを持たないが、そうした色や匂いの知覚を惹き起こす原因であると主張される。因果説は素朴実在論と結びついているし、現象主義とも矛盾するものではないが、とりわけ物的対象は直接知覚されないとする論者がこれを根拠とした。脚注(2)で言及したロックの代表的実在論(代表説、記号説)もこうした立場に立っている。またラッセルもこうした見解を採っていた。知覚の因果説については、エイヤー、前掲書、一五三頁以下、藤沢令夫『ギリシア哲学と現代』(一九八〇年)四八頁以下、一一一頁以下参照。

- (18) 故意は事後に成立する結果から影響を受けるものではないし、それによって阻却されることもありえないとする、わたしの年来の主張については、増田「犯罪構成における結果無価値の体系的地位と機能——シェーネとの対論をめぐって——」法律論叢第五〇巻第四号(一九七七年)九一頁参照。

- (19) これに対して、ある者が遺産目当てで甥を殺害しようと企て、かれを雷雨の最中に森へ行かせ雷雨によってかれを死に至らせようとし、期待通りにその死が生じたという講壇事例、あるいは同様に遺産目当てで叔父に飛行機旅行を勧め飛行機の墜落によりかれを死に至らしめようとし、期待通りにその死が生じたというような講壇事例においては、わたしの挙げた未開人の事例の「逆転された事例」を認めることができる。つまり、未開人の事例においてはそうした行為を行なえば結果が発生するであろうという、相互主観的に承認されている、コンヴェンショナルな傾性を認識していない場合であるのに対

して、落雷による死あるいは飛行機事故による死の事例においては、そうした行為を行えば結果が発生するであろうという傾性が相互主観的に認められていないにも拘らず誤認している場合だからである。

- (20) ルシユカは、故意というものはすべての精神的なものと同様認定され、証明されるのではなく、「帰属」されるものであるという。つまり、外部的事実と異なり、感覚的に知覚しえない(客観的に認定しえない)ところの、故意や、意思、行為、責任といったものは、自然科学者の言語ゲームには立ち現れないものであり、そこでは記述的な判断ではなく、「帰属的判断」(ascripives Urteil)がなされるものであり、推認がなされるだけだということになる。Hruschka, Über Schwierigkeiten mit dem Beweis des Vorsatzes, in: Kleinknecht-Festschrift, 1985, 191 ff. しかし、ルシユカのいう外部的事実も目撃者ではない裁判官の観点からは過去の出来事であるから、これを直接知覚しうるものではない。したがって帰属判断がなされるというならすべての事実がそうした判断に服するといわねばならないのではなからうか。vgl. J. Kühl, Prozeßgegenstand und Beweisthema im Strafverfahren, 1987, S. 136 Anm. 24 a. など、故意が傾性的に(dispositionell)説明されうるかという問題は、結局他者にとって直接観察しえない、故意をいかに認定・帰属するかという「メタレベル」で提起されることになるであろう。これに対して行為者は何をいかに認知するかという「対象レベル」では本文においても論究したように認知の内容としての「傾性」が問題となる。この点の区別は重要である。vgl. Kindhäuser, Intentionale Handlung, S. 98 ff., 122 ff.; W. Hassemer, a. a. O., S. 168 ff.; Mylonopoulos, a. a. O., S. 687 ff.; J. Kühl, a. a. O., S. 143 ff., 169 f.

- (21) 真理は(フレーゲの意味における)思想(Gedanke)の世界に帰属するものであって、知覚の世界には帰属しないとするハーマースの論点に「つづいて」Habermas, Wahrheitstheorien, in: Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns, 1984, S. 151 ff. を参照。そうでは妥当要求が問題化され、論拠によってだけ論証される「言明」(Aussage)につき真偽が問われることになる。むしろいえば、ハーマースにとって真理はわれわれが言明を主張することによってこの言明に結びつけるところの妥当要求であり、「主張」(言語行為、発話)自体が真偽を問われるのではなく主張されている言明につき真偽が問われる。しかし主張された言明の真理は主張の正当性に依存している。Habermas, a. a. O., S. 129.

- (22) Kühlen, Die Unterscheidung von vorsatzausschließendem und nichtvorsatzausschließendem Irrtum, 1987, S. 110 ff.

三 イメージによる対象の同定と故意における認知

刑法における故意の認知形式が意味を認知することに定位されており、意味に基づき対象を同定することに関わるものであるならば、そこでいう意味とは何か、また行為者はいかにして対象を同定するかといった基本的問題について考えてみる必要があるであろう。このような人の認知に関わる問題は、とりわけ認知心理学ないしは認知科学における最近の著しい成果を踏まえることが戦略的には極めて有効であると思われる。こうしたアプローチをドブスラフも試みている。そこで以下では、まずドブスラフの見解を概観し、検討することから始め、次いで概念論・意味理論としての「プロトタイプ論」を主題的に取り上げ、さらに認知科学における「記憶モデル」との関連で「パターン認知」の問題や「イメージによる対象の同定」の問題を検討することを通じて刑法における故意・錯誤問題の新たな地平を拓いてみたいと思う。

(1) ドブスラフの認知心理学的アプローチ

ドブスラフは、⁽¹⁾「言語表現」、「内包」それに「外延」を区別する「記号論的三角形」のモデルには賛同するものの、 \wedge 相互に孤立させられた \vee 諸性質・属性としての「内包」が「意味」を形成するとする、伝統的な意味理論を退ける。その主たる論拠は、そうした意味理論がとりわけ人間によって行なわれる対象同定の作業に照応していないという点に求められている。

そこでまずドブスラフは、人が対象を同定し、指示する作業を最近の認知心理学の洞察に依拠して記述する。その

洞察に従えば、例えばドイツ人がある対象を「*Apfel*」という言葉でりんごを指示する課題などは、複雑なプロセスの後によりやく実現されるものではないということが明らかにされる。そのプロセスは次のようなものとして記述される。すなわち、そのりんごは目を通じてとらえられる。続いてりんごについての正確な模写は、脳に転送され一瞬間の間にいわゆる「感覚記憶」の中に更なる処理のために蓄積される。こうした多量の蓄積のほんの一部がさらに「短期記憶」の中に達する。そこにおいて呈示された対象はすでにりんごとして同定される。もっともこうした脳の同定作業は、感覚的な生の素材を脳の中にすでに存在する情報と比較することによって実現されるものである。

このように「長期記憶」に貯蔵された情報が生の素材をいかに吟味し、またそのいかなる部分を「短期記憶」に転送するかを決定するものであるから、人間の脳の同定作業を分析しようとするならば、対象の同定のために必要な情報がいかなる形態で「長期記憶」に蓄えられているかを明確にしなければならない。こうした問題意識からドプスラフは、最近の心理学における記憶研究の成果に関心を向ける。ここでは「ネットワークモデル」(Netzwerkmodell)、「特徴モデル」(Merkmalsmodell)それに「二重コードモデル」(Modell der dualen Codierung)などが展開されているが、ドプスラフはとりわけ「二重コードモデル」に特別の関心を寄せ、これに依拠して対象の「同定」ならびに「指示」の問題を検討しようとする。

さて後で改めて論究されるように、ペイヴィオを中心とする、いわゆるハイメーシ派¹⁾の人達によって展開された「二重コード説」によれば、対象の「同定」ならびに「指示」を可能にする情報は二通りの仕方て脳に蓄えられるものと考えられている。すなわち、この説は「長期記憶」が情報を表象する二つのシステムを有すると仮定し、「具象的なイメージ」として情報を貯蔵する「イメージシステム」(イメージコード)と「言語の形態」で情報を貯蔵する「言語システム」(言語コード)とを区別する。しかもこうしたシステムは相互に密接に結びついており、したがっ

てイメージシステム内のイメージが言語的ラベルに変換され、また逆も可能であると理解されている。こうした「二重コード説」の主張の主眼は、言語の記憶にとって単なるリハーサル法(心の中で何度も繰り返して記憶するやり方)よりもイメージ化するほうが方略として有効だということを説明する点、および人が日常的な対象を同定する際に「生き生きとした、具象的なイメージ」の果たす役割を強調する点にあるといえよう。例えば、容易に画像化され、イメージ化される犬や猫、りんごやバナナなどの具象語の表象は、「イメージシステム」によって扱われるが、正義とか自由などの抽象的な概念は「イメージシステム」に対応する心的辞書に含まれていない。すなわち、抽象語は「言語システム」にしか表象されないが、具象語は「イメージシステム」と「言語システム」との両方で表象化されるため、より早い処理が期待されることになる。

こうした視点からドプスラフは、対象を同定するに当たり個々の性質を分離し孤立してしまふ伝統的な意味理論を退け、「二重コード説」に依拠してイメージによる同定論を展開するのである。但し、その際対象の同定のためには単なる写真のようなイメージではなく、対象の個々の性質についての具象的なイメージが投入されねばならない、と主張している。しかしイメージにおいては個々の特徴はあたかも一つの束としてまとめて処理されることになる。こうしたイメージをドプスラフは「圧縮された心像」(abgemagertes Bild)と称している。その際この「圧縮された心像」は、具体的な対象から成立するものでありこれとの類似性を有しているという点が前提とされる。そしてさらにドプスラフは、「二重コード説」をロッシュらによって展開されている「プロトタイプ論」と接合することによって「イメージによる対象の同定」の課題を実現しようとするのである。

すなわち、概念によってとらえられる「典型的な代表物」(つまり、極めて頻繁に現われる対象であるか、計量的な概念であれば平均的なもの)の特徴に関する統一的なイメージが、同定の課題にとって決定的に重要なものとして理

解される。こうした典型的な代表物についてのイメージをドブスラフは「プロトタイプ」と称している。もっともこの種のイメージは、「二重コード説」のもとでは言葉と結びつけられてはいるが、抽象的な言葉あるいは概念には蓄えられていないことになる。ところが法規にはしばしばそのような、対象の同定のためには原則的にふさわしくない抽象的な概念が含まれており、そのことが法適用論、故意論に固有の問題を提供することになる。

ところで、このように抽象的概念のためには脳が具象的なイメージを蓄えていないということは、ロッシュの研究によっても実証された。ロッシュは自然カテゴリーを、例えば「家具」というカテゴリーであれば、「家具—椅子—食事用の椅子」というように上位、中位、下位の三段階のレベルに区別し、中位のレベルを「基礎水準」(Basic level)と呼び、これがもっとも高い情報を持ち、そこにおいてカテゴリーのイメージが具体的に作られるものであり、かつ本源的な段階であって、いわば上位および下位のレベルに対して中心・核・典型となるものであると考えた。

このようなロッシュの見解に依拠してドブスラフは、非常に多様な現象形態を提示する対象、事象に関わる上位レベルの概念には統一的な具象的イメージは形成されないため、その種の概念は具体的対象を同定し、指示するために適当ではないという結論を導き出している。これに対して中間レベルの概念は、人間がまさに具体的な行為状況に対応することを通じて作り出すものである。行為においてはそのつどの状況に対する反作用として非常に素早い対応が要求されるため、人はそのときどきの行為状況の個々の要素を極めて迅速に認識し、指示することができねばならない。中間レベルの概念は、まさにこれを可能にする。人は中間レベルの概念に具象的なイメージを結びつけこれを脳に貯蔵するからである。

もっとも「二重コード説」に依拠するドブスラフは、中間レベルの概念だけにこうした中心的意義を与えているのではなく、下位レベルの概念も具象的なイメージを蓄えているという点では中間レベルの概念から本質的に区別され

ない、と主張する。いずれにせよ「二重コード説」に依拠して対象の同定はまさに生き生きとしたイメージに基づいて実現されるものであり、また脳がこうしたイメージを連想させる言葉を貯蔵しているためさらに対象は言葉によって指示されることになる、とドブスラフは考えている。

さらにそこからドブスラフは、新たな意味理論を構想する。つまり、伝統的な意味理論とともに対象を同定することを概念の意味の課題と看做し、こうした同定がいまやイメージに基づいて行なわれるならば、こうしたイメージを概念の意味と看做することが尤もだと主張し、意味を次のように定義する。すなわち、 \wedge 概念によってとらえられる対象のクラスに属する典型的な代表物から人間が獲得するところの、統一的なものとして蓄えられた特徴の束についてのイメージである \vee と。

だがこのように概念の意味を「イメージ」として規定することには全く問題がないわけではない。というのは、イメージは人によって、また状況によって様々でありうるからである。例えば、料理という言葉聞いててんぶらをイメージする者もいれば、寿司をイメージする者もいるであろう。したがって本来 \wedge 相互主観的なもの \vee と考えられ、それ故にこそコミュニケーションが可能となる概念の意味をイメージとして規定することは、現代の意味理論を後退させることになりはしないかという懸念が生ずることになるであろう。もっともドブスラフは典型的な代表物についてのイメージだけを、したがって共通の・典型的なイメージだけを意味としてとらえているため、こうした批判は直ちに妥当するものではないかもしれない。それでも意味と意味に対応するイメージとを一応区別しておくことが妥当ではないだろうかと思われる。

ともあれ、このような意味理論をドブスラフはさらに法適用論および故意論に適用する。ここでは差し当り故意論との関わりを見てみよう。行為者は故意の認知として必要な対象の同定をかれの知識のレパートリーに属する概念の

意味によって実現する。その際、法律について素養のない行為者は難解な解釈作業によって明らかにされる構成要件上の概念（規範概念）の意味など通常知らないであらう。したがってかれはこうした概念を自己の行為を認識するために投入することなどできない。かれが積極的に使いこなせる概念は、通常日常的世界を具体的な形態において把握しうるような概念であり、高度に直感的な概念である。そうした具象的な概念は、日常的世界における対象との絶えざる対応の中で社会化の過程を経て形成されるものであり、それ故そうした日常的世界を把握するために役立つものである。したがってそれは少なくとも先に示した「中間レベルの概念」でなければならぬ、ということになる。したがってまた、故意として必要な行為の認識もそのような具象的な概念によってだけ達成されることになる。つまり、こうした概念は構成要件によって指示される「事態」を記述するためにも使用される。そこで、行為者はそうした「事態を記述する概念」によって自己の行為を把握することになる。このようにして行為者が「事態記述」を認識し、自己の行為を認識している場合に、故意の知的要素が認められることになるのである。

こうしたドブスラフの見解は、これまで△記述的√構成要件要素とされてきたもの（例えば殺人罪における「人」）についてのみならず、△規範的√構成要件要素とされてきたもの（例えば文書偽造罪における「文書」）に関しても同様に妥当するものであり、そうした△記述的√要素と△規範的√要素との伝統的な区別自体を法適用論との関わりでも、また故意論・錯誤論との関わりでも否定することを前提にしている。これに対し伝統的見解によれば、とりわけいわゆる△規範的√構成要件要素の「社会的意味内容」の認識が必要だとされてきた。そこでこうした観点から、故意の知的要素を△事態記述の認識√とするドブスラフの提案に対する批判が予想される。

この点についてドブスラフはまず、「社会的意味内容」という概念がそもそも非常に曖昧であるという点でそうした伝統的見解には問題性がある、と指摘する。またこの点は度外視しても、次のような点でそれ以上の問題性が認め

られる、とする。すなわち、△規範的√構成要件要素（メルクマール）の社会的意味内容の認識を行為者に要求するということは、せいぜいこの概念の法的に重要な（意味）要素のすべてを認識していなければならないということの意味しうるものであるが、そうした認識は行為者が事態記述を認識する場合には有しうるものではないか、とドプスラフは指摘するのである。いずれにせよ行為者のほとんどすべては規範概念（ここでは構成要件上の概念、法規上の概念ということであって、いわゆる規範的構成要件要素という意味で使用されているわけではない）およびその意味を知らないという前提のもとでは、行為者の行為に関する認識は「事態記述」の認識に結びつけられねばならない、と主張する。もっとも、故意に社会的意味内容の認識を要求する見解が、常に規範概念（構成要件上の概念）との関わりでそうした意味内容を要求しているとする、ドプスラフの断定には問題がないではないと思われる。

ともあれ、このように「事態記述の認識」を故意の知的要素とするドプスラフの見解によれば、西独刑法十六条に記載されている「行為事情」という表現は、通説的見解のように構成要件要素（メルクマール）の意味においてとらえられてはならないことになる。通説のように行為事情と構成要件要素とを同一視するならば、行為者が構成要件要素を認識していない場合には、常に故意が阻却されることになる。しかし規範概念である構成要件要素の認識など法律に関しては素人である行為者に期待されえないものであるから、ほとんどの場合に故意を否定しなければならぬことになるであろう。そこでドプスラフは、西独刑法十六条の「行為事情」は「構成要件要素」によって指示される「指示対象」（外延）に当たるものである、とする。

要するに、故意の知的要素としてドプスラフによって要求されている「事態記述の認識」とは、内包としての構成要件要素によって指示される「指示対象」を故意の知的対象とするものではあるが、さらにこうした対象は日常的世における概念によっても記述されているものであり、行為者に故意を認めるためには素人でも使いこなせる、こ

した日常的な具象的概念によって事態（指示対象）が同定され、認識されれば十分だということを、主張するものであろう。

以上のような意味において理解された「事態記述の認識」を故意の知的要素とする前提にたつて、ドブスラフはさらに「素人の生活領域におけるパラレル評価」の概念、「包摂の錯誤」の概念それに「逆転された錯誤」における「不能未遂」と「幻覚犯」との区別などに関する論争的な問題について一定の結論を導き出している。

まず「素人の生活領域におけるパラレル評価」の概念については、行為者に故意を認めるためには構成要件概念の意味はそもそも要求されないものであるから、たとえ素人的な認識という形態であれそうした意味は要求されることはないのだと断言している。こうして「パラレル評価の理論」は退けられることになる。

次に「包摂の錯誤」については次のように述べている。すなわち、行為者が事態を完全に認識し、当該行為事情の事実的な意味を認識しながら、当該構成要件を自己に有利に誤って解釈している場合には、包摂の錯誤が認められ、それによって禁止の錯誤が成立しうることになる。だがこうした結論に関する通説の根拠づけには疑問が生ずる。通説は、故意には構成要件要素（規範概念）の意味の認識が必要であるとし、行為者が規範概念の意味について明確な認識を有しているけれども、具体的な行為がこの規範概念によってとらえられていない場合に、包摂の錯誤を認める。つまり、通説は同一の（規範）概念に関して様々な意味の認識を区別することにより、ある場合には故意を阻却する錯誤を認め、他の場合には包摂の錯誤を認める。また通説は、そうした様々な意味の認識を相互に区別する際に生ずる困難を「パラレル評価の理論」によって回避しようとするが、実際にはそうした困難を回避することなどできない。これに対してドブスラフにとって、規範概念（構成要件要素）の意味の認識は故意とは無関係であり、せいぜい不法の意識に関わるものである。このようにして故意を阻却する錯誤と禁止の錯誤の原因となる包摂の錯誤とが明確

に區別されることになる。さらにドブスラフは、不法の意識につき具体的な構成要件に関わっていなければならないということ（不法意識の可分性のテーゼ）を主張する。⁽³⁾そこで例えば、有名なビーアマット事件の場合に行爲者がサインの爲された書面だけを文書と考えたために、ビーアマットは文書ではないと看做したならば、西独刑法二六七条との關係では不法の意識は欠けることにもなる、と指摘している。⁽⁴⁾

最後に、不能未遂と幻覚犯との區別に関する問題についても一定の結論が導き出されている。この問題については、構成要件によってとらえられるであろうような事態の誤認が故意を根拠づける効果をもたらし、規範領域の誤った拡張は幻覚犯をもたらすものだとする点では見解は一致しているものの、行爲者の錯誤が構成要件の「先行領域」(Vorfeld)にある「規範」に関わっているような事例では困難が生じる。例えば、売却されたが買主に引き渡されていない物につき、行爲者(売主)が西独民法九二九条とは反対にその所有権が買主に移転していると考えているような事例の場合である。ブルクハルトはこうした事例の場合には例外なく幻覚犯であるということを論証したが、⁽⁵⁾そうした結論は、ドブスラフの故意論からはより簡単に根拠づけられている。つまり、故意の知的要素を事態記述に定位するドブスラフの見解によれば、行爲者が自己の物を売却したが買主には引き渡していないということを認識すれば事態の認識があり、こうした事態が物の他人性を導き出すものではないならば、「他人の」という規範的概念の意味に関する付加的な考慮はもはや故意には帰属しない。したがって故意にとって重要でないものを行爲者が認識したとしても、これによって故意が左右されることなどない、とするのである。しかしこうした論証には後で改めて論及されるように若干の問題がないではない。

(2) ロッシュのプロトタイプ論

人が多様な外界の中から対象をいかにして分節化してとらえるかという認知の過程を探究することは、法適用論においても、また故意・錯誤論においてもそこではまさに対象の同定の問題が主題化されているため必要不可欠なことであろう。その際、人が概念を用いて対象を同定するプロセスについて理解することが、したがって概念論について論究することが何よりも重要な課題といえるだろう。

この点について△古典的な√概念論、すなわち「内包・外延論」においては、「外延」の「必要十分条件」を提示する「内包」(性質・属性の集合)が「外延」(対象の集合)を完全に決定づけるものであり、しかも概念に包摂される個々の対象(外延を構成する対象)は「共通の性質・属性」を有し、また概念に包摂されない対象はそうした「共通の性質・属性」を全く有しないものとして、その配属が一義的に、あるいは「二値的に」に行なわれるという点に重要な特徴を見出しうるものである。

こうした「古典的な概念論」を攻撃する企てとしては、ヴィットゲンシュタインの後期哲学において展開された「家族的類似性の理論」⁽⁶⁾、一九六〇年代にザデーによって考案された「ファジィ論理、ファジィ集合論」⁽⁷⁾それにエリノア・ロッシュらによって構想化されている「プロトタイプ論」⁽⁸⁾やバッドナムによって展開されている「ステレオタイプ論」⁽⁹⁾などがある。ここでは「プロトタイプ論」を中心に検討するが、むしろそれらの構想は相互に密接に結びついており、したがって以下の論究においても当然相互的な関連を顧慮したいと思う。

ロッシュとその協力者マーヴィス⁽¹⁰⁾は、自然カテゴリー(日常的概念)の内的構造につき考察し、そうした概念が「典型、原型」(prototype)を中心にして形成され、またそのことが認知過程に一定の影響を及ぼすということを指摘した。例えば、「自動車」は、「馬」や「エレベーター」よりも「乗り物」カテゴリーの△典型的な√成員であり、したがって容易に「乗り物」として認識される。同様に、「椅子」は「じゅうたん」や「ストープ」よりも「家

具」カテゴリーとして△典型的な√成員であり、さらに「拳銃」は「槍」や「ハサミ」や「拳固」よりも「凶器」カテゴリーの△典型的な√成員であり、容易に想起されうるものである。つまり、カテゴリーの成員相互の間には「典型性」につき程度の差があり、他の成員と比較して最もその典型性の程度の高いものが「プロトタイプ」と考えられている。そして一つのカテゴリーに属する諸成員は、ウィットゲンシュタインの意味における「家族的類似性」によって相互に結びつけられている。

ロッシュらがこのように「プロトタイプ論」と結びつけているウィットゲンシュタインの意味における「家族的類似性」の理論というのは、ある概念に配属される諸対象はそれらのすべてに△共通する√ような「本質的な性質」によってではなく、家族の構成員の間に見られるような「類似性」によって結ばれているだけであり、さらにそうした概念の境界は「曖昧」であるということを主張するものである。ウィットゲンシュタインは、この点を「ゲーム」という語を用いて次のように説明している。

すなわち、盤ゲーム、カード・ゲーム、球技、競技等々そこには何かすべてに「共通する」ものは見られない。だが共通のものが見られなくてもそれらはみな「家族的類似性」の故にゲームと呼ばれる。例えば、盤ゲームとカード・ゲームとを比較すると盤ゲームに共通していた多くの特徴がカード・ゲームに関しては脱落し、ほかの特徴が現われる。またトランプのひとり占いでは勝ち負けがないが、球技では勝ち負けがある。もっとも子供がボールを壁にぶつけて遊ぶときには勝ち負けという特徴は消失する。さらに多くのゲームを調べてみれば、類似性が浮かんでは消えるのがわかる。その結果現われるのは、複雑に重なり合い、交差している類似性のネットワークである。この類似性は全体的でもあれば個別的でもある。いずれにせよこうした類似性は「家族的類似性」と呼ぶのが適切である。というのは、それは家族の構成員の間で体格、容貌、動作、気質などに関して類似性が重なり合い、交差しているのと

同じようなものだからである、とするのである。要するに、そこでは概念を共通の性質・属性の集合と結びつけてとらえる概念論が退けられているのであり、必要十分条件を提示する内包によって明確な外延が規定されるとする内包・外延論が攻撃されているのである。

先に指摘したようにロッシュとマーヴィスによれば、自然カテゴリーを構成する成員もこのような「家族的類似性」によって結びつけられているものであり、しかもそうした「家族的類似性」は程度を付しうるものであって、その程度の極めて高いものが「プロトタイプ」(中心的傾向)として特徴づけられることになる。したがってカテゴリーは最も典程度の高い対象としての「プロトタイプ」(典型、原型)を中心にその周辺に典程度・非典程度(家族的類似性の程度)に従って非典型的対象が位置し、しかもカテゴリーの成員と非成員との間に絶対的な境界線など存在しないし、その限りで自然カテゴリーは本質的に「ファジィ」(fuzzy)なものと考えられている。

さらに階層構造を有する自然言語の概念についても一定の結論が導き出される。例えば、上位レベルの「楽器」概念は「ギター」(やピアノ)概念などを、「ギター」概念はさらに下位レベルのフォークギター(やクラシックギター)概念などを包摂するようにその抽象の度合いによって概念は階層化されている。先にも言及したように、ロッシュはそこでこの三つのレベルのうち中間レベルの概念を「基礎水準カテゴリー」(basic level categorie)と称してこれに中心的な意味を与えるのである。⁽¹¹⁾つまり、この「基礎水準カテゴリー」を中心にして概念は階層化されているのであり、階層間においてまさにこのレベルの概念がいわば「プロトタイプ」を形成するということになる。そしてわれわれが外界を分節化し、対象をとらえる場合には、まずこの基礎レベルの概念によってとらえ、さらにそれ以上の処理を付加することによって他のレベルの概念への配属が行なわれる、ということになる。

こうした「プロトタイプ論」は、言葉の意味を本来的に曖昧なものとしてとらえる点で法理論におけるいわゆる

「意味の核心・周縁理論」ないしは「類型論」と結びつけられるものである。つまり、このアプローチによれば、法規の表現の「意味の核心」に属するプロトタイプのケースを「意味の周縁」に属するニュートラルな事例と比較して、その間に認められる「類似性」の程度に従って、そうした事例の当該法規（法概念）への配属がなされるものと考えられているからである。⁽¹²⁾ここではさらにドブスラフによって指摘されたように、「プロトタイプ論」が故意論にもいかに深く関わっているかが問題とされるべきであろう。

さて「プロトタイプ論」に依拠するならば、人が対象を同定する場合にはかれの脳に貯蔵されている「プロトタイプ」と感覚受容器を通じて外界から獲得された感覚情報とを比較・照合することが課題として設定されることになる。その際、知識と感覚情報とが必ずしも厳密に照合されるのではなく、近似的に照合されるものであると理解されるならば、故意における認知にとってもそもそも法概念の厳密な「内包」の理解など要求しえないものであることは自明であろう。行為者は、多かれ少なかれウィットゲンシュタインの意味における「家族的類似性」に従って対象を同定しているからである。また、認知がまず「基礎レベル」で生じるとするロッシュらの見解によれば、法概念が階層的構造を提示し、法規が抽象的な上位概念で規定されている場合には、上位概念によって対象をとらえることを行為者に要求することも同様に無理ではないか、ということになるだろう。

例えば、凶器準備集合罪の構成要件における「凶器」という概念など、「凶器―ナイフ―登山ナイフ」というように階層的構造を成している。このような場合に、行為者は「ナイフ」という基礎水準のカテゴリーで対象を同定するのが通常であるから、「ナイフ」概念についての意味を理解し、対象を「ナイフ」として同定していれば、通常は故意における認知としては十分であるということになる。同様に、贓物罪の構成要件における「贓物」の場合にも、「贓物―盗まれた物―万引きされた物」といった階層的構造が提示されるが、行為者にとっては「盗まれた物」とい

った基礎水準のカテゴリで対象を同定していれば故意の認知形式としては十分であろう(同様に、物—犬—シェパードなど)。この場合にはさらに、「贓物」あるいは「牙保」などという特殊専門的な表現を素人は通常知らないという事情が付け加わることになる。そこで法規上の表現による同定を故意の認知に要求するならば、贓物牙保罪などを犯しうるのは、法律家かせいぜい法学部の学生あるいは卒業生に限られることになるであろう。したがって、「パラレル評価の理論」というものが法規上の表現の△有権的√意味にパラレルに対応する△日常言語的√意味(社会的意味)を理解している場合にのみ行為者に故意を認定する理論としてとらえられるとするならば、法規が抽象的な上位概念や非日常的な表現を使用している場合などにはそうした抽象レベルや非日常的表現においてはそもそも△有権的√意味に対応する△日常言語的√意味など考えられないためこの理論は不適切なものとなるであろう。

(3) 記憶モデルとイメージによる対象の同定としてのパターン認知

人があるものを何かとして同定するということは、そのものから得た感覚的な情報とかれの脳の中にあると仮定される貯蔵庫に「知識」として蓄えられている、その何かについての有意味な情報とを照合することである。そうした貯蔵されている知識は必要に応じて「検索」され、呼び戻されて「作動記憶」として活性化する。そこで対象の同定の問題について考えるためには記憶の過程を理解しておくことが必要である。

認知心理学においては情報処理に関して種々のモデルが考案されているが、なかでも有力な「貯蔵庫モデル」⁽¹³⁾によれば、外界からの刺激は「感覚登録器(感覚情報貯蔵庫)」に「感覚記憶」として一時的に蓄えられ、「パターン認知」⁽¹⁴⁾により有意味な情報を取り出される。これが知覚の過程である。「パターン認知」(パターン認識)は感覚登録器内の情報と過去に獲得された知識とが接触する過程であり、ある感覚的情報と有意味な概念とが照応するときに実現され

るものである。したがってまさに「パターン認知」によって対象の同定が行なわれる。さらにこうして取り出された情報は、「短期記憶」(short-term memory)の貯蔵庫に転送され、活性化された情報として作用する。したがって「短期記憶」は、情報の一時的な貯蔵庫としてばかりでなく情報処理を積極的に行なう場としても意味を持つことになる。そこでは意識内容に対応する情報が蓄えられているが、「短期記憶」(一次記憶)の容量には限界があるため、リハースルにより情報は保持され、さらに「長期記憶」(long-term memory)に転送されればそうした情報は知識として永続的に貯蔵される。しかし「長期記憶」(二次記憶)の貯蔵庫に転送されない情報は短時間で消滅してしまふ。

以上のように「パターン認知」は、対象を「同定」する過程として理解されるが、同時に「感覚登録器」(感覚情報貯蔵庫)と「短期記憶貯蔵庫」とを媒介し、刺激を「コード化」(符合理化)する手段であり、感覚的な情報を意味的に処理するプロセスとしてもとらえられている。前述したように、「パターン認知」が遂行されるためには、「感覚登録器」の十分に処理されていない情報が「長期記憶」の貯蔵庫に「知識」として蓄えられている情報と照合されることが必要である。そこで、「パターン認知」の過程の理解を深めるためには、なかならず「長期記憶」の構造そのものについて探究しなければならない。

「長期記憶」の貯蔵庫はわれわれが過去の経験から獲得した知識を貯蔵しており、「パターン認知」を可能にするなどわれわれの認知能力の基礎となる膨大な知識を貯蔵している。そうした知識をどのような形で貯蔵しているかについては、当然様々な観点から論議がなされているが、まず長期記憶を「意味的記憶」と「エピソード的記憶」とに分けることが(むしろその間に相互作用が認められるが)今日一般化している。すなわち、「意味的記憶」はわれわれが言語を使用するために必要とするような情報など、特定の時間・空間に依存しない規則・概念に関する情報の保持に関わっている。これに対して「エピソード記憶」は一定の時間・空間に依存する事柄を対象とする。例えば、

「昨年の誕生日に自宅でケーキを食べた」というような出来事の記憶を貯蔵している。故意における認知形式を考察しようとするわれわれの課題にとつては、とりわけ「意味的記憶」が重要なように思われる。

こうした「意味的記憶」をいかにして「長期記憶」の貯蔵庫に貯蔵するかについては、「ネットワークモデル」や「特徴モデル」などが考案されている。長期記憶の「ネットワークモデル」においては、長期記憶を心的辞書と考えるならば、概念などは五十音順に並んでいるのではなく、概念間の意味的な関連性によって結びつけられているネットワークの形で貯蔵されている、と仮定されるのである。これに対して長期記憶の「特徴モデル」では、概念はネットワークや他の概念との関係によって規定されるのではなく、特徴の集合として定義されることになる。いずれのモデルがより優れているかは、目下決定しえないものである⁽¹⁶⁾。

さらに意味的記憶の問題は、記憶におけるイメージの問題と深い関わりを有している。一九六〇年代に認知心理学でイメージの問題が重視されるようになったのも言語記憶にとつてイメージの効果が注目されたことによる。つまり、イメージと結びつけることによって単語の記憶を容易に達成することができるということは、われわれの日常的な体験においても自明なことであろう。こうした体験から、われわれの長期記憶は二つの異なるシステムを内蔵するとする「二重コード説」(dual coding theory)がペイヴィオを中心とする、いわゆるハイメージ派⁽¹⁷⁾(アナログ派)の人達によって主張された。つまり、このモデルによれば、人は「長期記憶」における情報を言語的(特に音声言語的)なシステムならびにイメージ(特に視覚的なイメージ)的なシステムという二つの形式で符合化(コード化)しているということになる。こうした二つのシステムは相互に密接に関連し合っているが、「イメージシステム」は具象的な概念の表象のみを扱う点で「言語的システム」とは異なるものと考えられている。つまり、そうした概念は画像化されやすく、イメージ化されやすいからである。したがって「言語的システム」のみによって扱われる抽象的概

念よりも二つのシステムで扱われる具象的な概念の方が容易に記憶されやすい、と説明されることになる。こうした「二重コード説」は、そのイメージを△絵のようなもの▽として理解したため、ピリシンを中心とする、いわゆる△命題派▽の人達によって攻撃され、ここに△イメージ論争▽なる大論争が展開されることになった。△命題派▽は「一元コード説」を唱えるものであるが、それと同時に、「イメージ」は△絵のようなもの▽ではなく、その内容となる情報が△命題▽による記述という形で存在していると主張するものである。このようなイメージを命題とする「命題コード説」は、イメージというものはイメージの対象となる事柄について一定の△理解・解釈▽がなされた情報であり、未処理の情報などではないということを主張するものである。⁽²⁰⁾

いずれにせよこのような△イメージ論争▽は未だ決着がついておらず、いずれのモデルがより優れているかは今後の展開を待たねばならないであろう。だが、抽象的な概念よりもイメージ性の豊かな具象的な概念の方が容易に記憶しうるものだとする「二重コード説」の主張、およびイメージは単なる△絵のようなもの▽ではなく、理解され、解されたものであり、△意味的に▽処理されたものだとする「命題コード説」の主張にはそれぞれ反駁しえないものがあるように思われるし、両説の綜合が目指されるべきなのかもしれない。

ところで先に論及したように、ドプスラフは「二重コード説」に依拠してとりわけイメージによる対象の同定ということを主張した。しかしそこでは「イメージ」は単なる△絵のようなもの▽と考えられているのではなく、むしろイメージは概念の意味と看做され、概念の意味は概念の外延の典型的代表物から獲得される特徴の束についての統一的なイメージとして規定されてさえている。いずれにせよそこでの問題は、果たしてイメージが対象の同定のために役立ちうるものであろうかという点である。この点をさらに追求するために、われわれは「パターン認知」の過程そのものについて探究を進めねばならない。

「パターン認知」はこれまで指摘してきたように、感覚情報貯蔵庫（感覚登録器）の情報（刺激）と長期記憶貯蔵庫の情報（知識）とが相互作用し、照合される過程である。つまり、それは感覚的な情報が概念と照合され、意味的に処理される過程であって、こうして意味的に処理された情報はさらに「短期記憶」に転送されることになるのである。人間のV「パターン認知」においては通常「命名」（言葉による指示、表示）がその効果として伴うが、命名は必ずしも「パターン認知」にとって必然的なものとは看做されていない。命名、指示（表示）がなされなくとも刺激は一定の知識と関係づけられ、照合されることもあるからである。もっとも、故意帰責にとってはそうした「パターン認知」に言葉を対応させているという意味における八言語的なV認知が必要とされるということは、先に論述したとおりである。

このような「パターン認知」の過程は、感覚情報を「分析」する過程、これを長期記憶の情報と「比較」する過程、それにいかなる記憶コードに刺激情報が最適なものとして照合されるかを「決定」する過程とに区別されているが、さらにこうした「パターン認知」をいかにして実現するかについて種々のモデルが考案されている。

まず「鋳型仮説」（template hypothesis）と呼ばれるモデルによれば、長期記憶の中にある膨大な数の鋳型群もしくは正確なイメージ群との比較がなされねばならない。しかしこのモデルでは、正確に一致する鋳型がなければ「パターン認知」は失敗に帰するものであり、多種多様な人間のパターン認知にとって融通性に欠け、ノイズに弱いという点でそれは現在論駁されている。

そこで先にも論究した「プロトタイプ」による「パターン認知」のモデルが構想化されている。プロトタイプモデルによれば、長期記憶の貯蔵庫には「プロトタイプ」が蓄えられており、これに基づいてわれわれはカテゴリーの成員を認知することになる。そこでは鋳型によるそっくりそのままの照合ではなく、長期記憶に貯蔵されているプロト

タイプのパターンとの類似的照合が行なわれるものと理解されている。

さらに「特徴分析」モデルが構想化されている。このモデルは、パターンというものは個々の特徴成分からなる形態であるから、長期記憶のコードもこのような特徴成分のリストからなっている、と主張するのである。そこで刺激情報の特徴成分が分析され、そのリストができ上がると長期記憶の中にある特徴成分のリストと比較され、最も適合するリストによりパターンが認知されることになる。とりわけ「パンデモニアム」(pandemonium)と呼ばれるモデルが注目を浴びている。⁽²¹⁾ このモデルではパターンに働きかける一連の「デーモン」が想定される。まず「イメージデーモン」は刺激を感覚的情報として記録する。次に感覚情報は「特徴デーモン」によって分析され、パターンの中から特徴が抽出される。さらに「認知デーモン」が「特徴デーモン」の反応を監視し、自己の担当するパターンの特徴を発見したら大声で叫び(信号を出し)、さらにもっと多くの特徴を発見したらそれだけ大きな声で叫ぶことになる。

こうして「パンデモニアム」(大混乱、修羅場)が生じると、最後に「決定デーモン」が最も大きな声で叫んでいる。「認知デーモン」がどこにいるかを決定し、それによってパターンが認知されることになる、とするのである。

「パターン認知」においてプロトタイプあるいは特徴リストを使うかはともかくとして、感覚情報と長期記憶のコードとが「系列的に」、すなわち一個ずつ順次に行なわれるのではなく、「並列的に」、すなわち同時進行で行なわれるという点が重要である。だが長期記憶のすべてのコードとの比較が同時に行なわれるのではなく、「文脈」によって照合の可能性のあるコードだけが限定されると考えられる。例えば、机の上にあるものはペン、本、ノートなどであり、それらのコードとの比較が並列的に遂行されればよい。また「パターン認知」は、下位の感覚情報から上位の概念へと展開する「ボトムアップ的」ないしは「データ駆動的」過程と、いま取り上げた文脈効果からも理解されるように、上位の概念から下位の感覚情報へと展開する「トップダウン的」ないしは「概念駆動的」過程との「相互作用

用」として理解されるべきものである。つまり、感覚情報と知識・概念・「スキーマ」⁽²²⁾とは相互的な循環によって結びつけられており、△感覚刺激はすでに受容される際に仮説的なものから影響を受けている△と考えられる。⁽²³⁾したがって「感覚」と「知覚」とを厳密に区別することもできないといえよう。

「パターン認知」をこのように「ボトムアップ的处理」と「トップダウン的处理」との「相互作用」として特徴づけることは、われわれによって理解された「知覚の理論・知識・概念・概念負荷性」のテーゼにまさに対応することになるであろう。

またそこから、必要十分条件を提示する「内包」によって「外延」が規定されるというようにして「パターン認知」が行なわれるものではないということが理解される。例えば、ある対象を「人」と同定し、その「パターン」を認知する際、通常「人」についての必要十分条件を一定の対象に適用してこれを「人」の外延に加えるというような論理的操作が行なわれているのではない。それに多くの経験的な概念につき必要十分な内包を定義することなどそもそも不可能なことである。

例えば、古代ギリシアのアカデメイアの学者たちのように「人」を△羽毛のない二足の動物である△と定義するならば、羽毛を抜かれた鶏も「人」概念の外延に帰属することになるし、また逆に戦争で片足を失った者はもはや「人」ではないということになるであろう。だからといってこうした定義を改善したところで完全なる内包など規定できるものではない。経験的な概念は本質的に曖昧（ファジィ）であり、そうした曖昧さを完全に除去することなどできないからである。われわれはこうした曖昧さを対象を同定する際にも必然的に引きずっている。けれども概念の「核」となりうるもの、「プロトタイプ」の「デフォールト値」(default value)、つまり否定されない限りで妥当させられる、暫定的な期待値を当てにしてそれとの「類比」によってそうした同定が実現されるものであろう（こうした認知

にはパースのいう「仮設推論」^{アプダクシオン}に対応するものがあるように思われる。その際そうした「核」ないしは「プロトタイプ」についてのハスキーマ化された√統一的・包括的な「イメージ」が少なからず寄与していることを否定することはできないように思われる。

このようにハ枠組としての√「イメージ」、あるいは個別的な具象的イメージを形作り、直観（感性）と概念（悟性）とを綜合する「構想力」の「スキーマ」が対象の同定にとって重要な働きを持っているものだと思えば、人は当然まず「イメージ性の豊かな概念」によって外界を分節化し、対象を同定することになるであろう。このイメージ性の豊かな概念とはわれわれの日常生活世界における概念であり、素人の生活領域における概念である。われわれはまずこうした日常的な生活形式に根ざす具象的な概念によって外界を分節化してとらえることになるのである。こうした洞察は、故意論においても重要な意味を有することになるであろう。つまり、たとえ立法者が抽象的な概念によって法規を、構成要件を規定したとしても、行為者がそうした抽象的なレベルの概念によって対象を同定することなどほとんどないものであるならば、また刑罰法規が法律については素人である行為者に対する「行動規範」として機能することを一次的な使命とするものであるならば、行為者が外界を分節化するに際して拠り所とするイメージ性豊かな具象的概念によって対象（むろん刑法概念によって指示される対象）を同定しているか否かが故意帰責にとって原則的に重要な意味を持つことになるのではなからうか。

もっともこうした△目的合理的な√アプローチのみが故意帰責にとって決定的なものではない。場合によっては△価値合理的な√観点から、さらに△特殊な√意味をも行為者が理解している場合にのみ故意帰責を認めることが妥当な場合も考えられる。先に論及したように、ドブスラフは、故意の知的要素としては「事態記述の認識」が必要でありそれで十分であることから、さらにいわゆる「指示概念」(Verweisungsbegriffe)の場合にも構成要件の

「先行領域」(Vorfeld)における規範概念の意味を認識する必要はないとする結論を簡単に導き出してしまった。⁽²⁵⁾ もっともドブスラフが引き合いに出している「指示概念」の錯誤の事例はいわゆる「逆転された錯誤の事例」であって、このような場合には行為者が△刑法外・構成要件外の▽「指示領域」(Verweisungsbereich)における規範を誤認しているため、いわゆる「逆転原理」(反対推論の原理)によって幻覚犯を認めることになるから、行為者にとっては有利な結論が導き出されることになる。しかしながらドブスラフの見解においては、「指示領域・先行領域」における規範(規範概念)の認識は本来故意には必要でないとすることが前提とされているため、逆転されていない「通常の」錯誤の事例においては、そうした規範概念の意味を理解していない者についても「事態記述の認識」があれば故意帰責を単純に認めることになるであろう。しかしこの場合には、ドブスラフのテーゼの一般化を阻害しうる新たな観点が現われ出てくるということを考慮に入れておかねばならない。

つまり、明確性の原則に服する刑罰法規というものは、禁止されるべき行為を本来それ自体で国民一般に対して明確に告知する使命を担っている。しかしながら刑罰法規はすべての概念を網羅的に刑法自体に記述するのではなく、規制される対象の性質によってはその内容を「白地」にし、その内容充足を刑法に先行する動態的な領域(非刑罰法規、社会倫理的規範、科学的な基準など)に指示することもある。そうした場合には、刑法の告知機能はそれだけ弱められるであろうが、そのために行為者の知らないしは誤解を招いたとしてもそのことをかれに不利益に帰せしめ、故意阻却を認めないことが果たして妥当であるか否かという観点から「指示概念の錯誤」が検討されねばならないであろう。⁽²⁶⁾ しかしこの問題は、更なる考察を必要とするため本稿の主題としては取り上げずにおこう。ただこの問題との関わりで「パラレル評価の理論」について再び若干論及しておこう。

「パラレル評価の理論」をいかにとらえるかということがまず問題ではあるが、少なくともこの理論によっては解

決してない錯誤の事例があるということが重要であろう。例の「タヌキ・ムジナ事件」では、先にも指摘したように、行為者は当該対象についての日常言語的意味（社会的意味）をまさに認識してこれをムジナとして同定している。しかもその当時の日常生活領域におけるコンヴェンショナルな意味によれば、ムジナはタヌキとは別物である。したがって行為者がムジナはタヌキではないと考えたとしても、日常言語的意味のレベルにおいては全く錯誤など存在していない。これに対して△前刑法的な∨動物学的意味においてはムジナはタヌキの一種であり、この意味のレベルを基準にする場合に初めて錯誤の問題が生ずることになる。そこで行為者が当該対象の社会的・日常的意思を認識しているため、故意を認めるべきであるか、それともかれが△刑法外の∨動物学的意味を理解していないために故意を否定すべきかが問題とされねばならない。「パラレル評価の理論」は、有権的意味と日常言語的意味とが正確には一致しないが、後者が前者にパラレルに対応していることを前提とし、後者の意味認識があれば行為者に故意を認めるものであらう。

ところが「タヌキ・ムジナ事件」においては、動物学的意味と日常言語的意味とが当該対象についてはパラレルに対応しているところかまさに相反するものであるから、そもそも「パラレル評価の理論」を適用すべき前提が欠けているといえよう。したがってただ単に「社会的意味」を認識しているから故意を認めるべきか、それともそうした意味が有権的な意味にパラレルに対応していないから故意を否定すべきかについて、「パラレル評価の理論」は何も決定することができない。そこでは率直に△刑法法に先行する∨動物学上の意味の認識を故意帰責のために要求すべきか否かが問題にされねばならないであらう。

要するに、結論としていえば、行為者はイメージ性の豊かな日常的概念によって対象を同定するのが通常であり、故意を認めるためにはそうした具象的概念による同定が必要ではあるが、さらに場合によってはそれ以上の意味を理

解して同定することも故意帰責のためには要求されることもありはしないかということが一般的に問われねばならぬだろう。

- (1) *Dopsloff, Plädoyer für einen Verzicht auf die Unterscheidung in deskriptive und normative Tatbestandsmerkmale*, GA 1987, S. 1 ff.
- (2) 廣松渉「言語と認識の問題」講座・現代の哲学 三(一九七七年)二二二頁以下参照。vgl. Koch, *Die juristische Methode im Staatsrecht*, 1977, S. 36.
- (3) ドプスラフは故意の「阻止機能」についても論及している。その際正当にも責任説を前提とする限り、行為を阻止する動因は決して故意の知的要素自体から発するものではありえないと指摘している。このことを単純な事例で次のように説明している。すなわち、ある者が、長い干ばつの故に洗車を禁止されている国を車で旅行する。ところがかれはそうした法律を知らないため自分の車を洗ってしまう。この場合、かれは自己の行なっている行為を認識しているけれども、その行為が違法であるということは知らない。つまり、かれには不法の意識はない。このような場合に、洗車をしないという動因は事実の単なる認識から発することはありえない。阻止への動因はその旅行者がその行為が適法ではないということも知っている場合にせいぜい期待されるにすぎない、と。それ故、不法意識と結びつけられた場合に初めて故意の知的要素には「間接的なV(動機づけ)阻止機能が帰属することになる。*Dopsloff, a.a.O.*, S. 20 f.
- (4) ビーフマット事件については、増田「使用規則の錯誤と指示対象の錯誤—錯誤問題への意味理論的アプローチ」四四五、四七二頁参照。
- (5) ブルクハルトの見解については、増田、前掲論文、四七九頁脚注(18)参照。
- (6) *Wittgenstein, Philosophische Untersuchungen*, Nr. 66 ff. ウィットゲンシュタイン(大森荘蔵訳)『青色本』(一九七五年)四六頁以下、五七頁以下参照。vgl. *E. v. Savigny, Wittgensteins Philosophische Untersuchungen. Ein Kommentar für Leser*, Band I, 1988, S. 115 ff. など。増田、前掲論文、四六一頁脚注(2)を参照。ウィットゲンシュタインは「規準」(Kriterium)によって語を用いることを示唆している。この「規準」は、必要十分条件ではなく、否定されない限り仮定されるような性質、「デフォルト的」性質によって構成される。例えば、「人」であることの規準には、「二足」、「言語を使用する」、「高等な頭脳」などの性質が属することになるであろうが、実際には片足の者もあるし、また言語を使

用できない幼児や失語症の者もいるし、高等でない頭脳の持ち主もいるため、こうした「規準」は「人」という言葉を使用するための必要条件でも十分条件でもない。

- (7) ファジィ集合論については、ザデー(室伏俊明訳)「ファジィ論理」別冊・数理科学、ファジィ理論への道(一九八八年)一六二頁以下、水本雅晴『ファジィ理論とその応用』(一九八八年)一三三頁以下、菅野道夫「ファジィ理論の目指すもの」第四回ファジィシステムシンポジウム講演論文集(一九八八年)三頁以下、中村雄二郎「ファジィと新しい科学認識論」同講演論文集、一七頁以下参照。また増田「法発見論と類推禁止の原則」法律論叢第三卷一・二(合併号)(一九八〇年)二一頁以下、同「曖昧な法概念のアナトミア」法の理論七号(一九八六年)一一一頁以下参照。

- (8) *Rosch*, Natural categories, *Cognitive Psychology* 4(1973), 328-350; *Rosch/Mervis*, Family resemblance: Studies in the internal structure of categories, *Cognitive Psychology* 7 (1975), 573-605; *Rosch*, On the internal structure of perceptual and semantic categories, in: *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, 1973, 111-144; *Rosch*, Human categorization, in: *Studies in Crosscultural Psychology* Vol. 1, 1977, 1-49; *Mervis/Rosch*, Categorization of natural objects, *Annual Review of Psychology* 32 (1981), 89-115. ロッシャの「プロトタイプ」論は随所で論及されている。例えば、土居道栄「概念のプロトタイプ」奈良女子大学文学部研究年報二二(一九七九年)一一一頁以下、清水御代明「概念的思考」現代基礎心理学七(一九八三年)八七頁以下、桐村雅彦「認知と記憶」認知心理学講座二(一九八五年)五九頁以下、山下清美(市川伸一、伊東裕司編)『認知心理学を知る』(一九八七年)五七頁以下、益岡隆志「プロトタイプ論の必要性」言語一九八七年十一月号、三八頁以下、御領謙「現代の認知心理学における「原型」について」理想第六三六号(一九八七年)八九頁以下参照。

- (9) パットナム(大出晃監修、藤川吉美訳)『精神と世界に関する方法』(一九七五年)一四七頁以下、同(藤川吉美訳)『科学的認識の構造』(一九八四年)二三三、一五七一—一五八頁参照。パットナムによれば、「意味」として理解される「ステレオタイプ」は語に結びついた標準的な最小限度の情報であり、語と結びついた信念ないしは理想化された信念の標準化された集合である。例えば、虎には典型的にオレンジ色と黒色の縞があるという信念は虎のステレオタイプの一部である。こうした「ステレオタイプ」は語の外延を決定するためのものではない。こうした「ステレオタイプ」は専門家が外延を規定するために用いる基準(内包)とは区別される。言語は検証や反証それだけに分類のために使用されるのではなく、論議のためにも使用される。「ステレオタイプ」は分類のためではなく論議のために使用されるものである。パットナムはクリプキ

とともに意味を外界の対象の實在的な構造に対応するものと考え、点で「實在論」(現在では単なる「内的實在論」といわれる立場に至った。こうしたバットナムの「転向」については、藤田晋吾『意味と實在』(一九八四年)七七頁以下参照)の立場を出発点として、内包・外延論に異議を唱えている。その際、内包によって外延を規定しえないような語や固有名のように外延のみを有する語があるということが指摘されている。クリプキ(八木沢敬、野家啓一訳)『名指しと必然性』(一九八五年)、野本和幸『現代の論理的意味論』(一九八八年)二五〇頁以下参照。なお、バットナムの「ステレオタイプ」論に好意的な見解として、Dopst, Wortbedeutung und Normzweck als die maßgeblichen Kriterien für die Auslegung von Strafrechtsnormen, 1985, S. 41 ff. また批判的見解として、Koch/Rüßmann, Juristische Begründungslehre, S. 145 ff. を参照。コッホとリュースマンの批判は、内包により外延が決定しえないという場合には結局「曖昧さ」あるいは「有孔性」が問題になっているにすぎない、というものである。しかし素人間のコミュニケーションにおいて「ステレオタイプ」は重要な役割を担っており、したがって素人である行為者の認知の問題を考える場合にも「ステレオタイプ」の意味を無視することはできないであろう。なお、ロッシュの場合にも、バットナムやクリプキのように、實在論的傾向がないではない。ロッシュの研究は、とりわけ「サピア・アウウォーフの仮説」の反証となっている。ガードナー(佐伯胖、海保博之監訳)『認知革命』(一九八七年)三二七頁以下参照。

(10) Rosch/Mervis, Cognitive Psychology 7, 579.

(11) Rosch, Human categorization, 32; Mervis/Rosch, Annual Review of Psychology 32, 92 ff.

(12) 増田、前掲論文、一二五頁以下、同「刑罰法規の主観的・目的論的解釈」法律論叢第六〇巻第四・五合併号(一九八八年)一八八頁参照。

(13) クラツキー(箱田裕司、中溝幸雄訳)『記憶のしくみⅠ・Ⅱ』(一九八二年)、リンゼイ/ノーマン(中溝裕司、近藤倫明訳)『情報処理心理学入門Ⅱ』(一九八四年)五二頁以下、G・R・ロフタス/E・F・ロフタス(大村章道訳)『人間の記憶』(一九八〇年)一一頁以下、小谷津孝明編『現代基礎心理学四』(一九八二年)、森敏昭『記憶のモデル論』認知心理学講座二、三五頁以下参照。貯蔵庫モデルのための論拠として次のような症例(ミルナー・シンドローム)がある。すなわち、脳の「海馬」領域(Hippocampus)を損傷した患者は、遠い過去の記憶を保持しており、また短時間記憶を保持できるが、それを永続的に保持することはできず、あたかも短期記憶を長期記憶に転送する能力を失っているように見える。これは貯蔵庫モデルの妥当性にとって有力な論拠となっている。クラツキー、前掲書Ⅰ、二五頁、ボバー/エクルズ『自我と脳

〔下〕五六六頁以下、グラニット（中村嘉男訳）『目的をもつ脳』（一九七八年）二二六頁参照。なお、貯蔵庫モデルに対する批判は、情報は単純に貯蔵されるものではなく、意味的に処理され、変換されて記憶され、また意味的に再構成されて想起されるという点を看過してしまうものである。佐伯胖（渕一博編）『認知科学への招待』（一九八三年）二〇頁以下参照。いずれにせよこうした問題点を考慮に入れておけば、短期・長期記憶の「貯蔵庫」というか「レベル」というかは言葉の問題に帰するだろう。「貯蔵庫モデル」に対する批判として展開された「処理水準説」（levels of processing theory）は、短期記憶と長期記憶といった構造的段階を区別しないが、それらを処理過程と考える。そして処理の深さにしたがって、物理的処理、音響的処理、意味的処理の過程を区別するため、実質的には貯蔵庫モデルにおける感覚的貯蔵庫、短期貯蔵庫、長期貯蔵庫に対応する区別を行なっている。ただ処理水準説は、記憶成績にとつて単なるリハーサルよりも意味的に処理すること、処理の深さが重要であるということを描した点に功績が認められる。クラツキー、前掲書Ⅰ、三六頁以下参照。ちなみに、感覚情報貯蔵では、情報はせいぜい一、二秒（アイコンと呼ばれる視覚情報で一秒弱、エコーと呼ばれる聴覚情報では二秒程度）、短期記憶ではリハーサルしなければせいぜい三十秒程度しか保持されない、といわれる。なお、「中間期記憶」を認めるモデルもある。

- (14) パターン認知一般については、ルーメルハート（御領謙訳）『人間の情報処理』（一九七九年）四三頁以下、ナイサー（大羽葵訳）『認知心理学』（一九八一年）五八頁以下、アンダーソン（富田達彦、増井透、川崎恵里子、岸学訳）『認知心理学概論』（一九八二年）三五頁以下、渡辺慧『認識とパターン』（一九七八年）、R・ラックマン/J・L・ラックマン/バターフィールド（箱田裕司、鈴木光太郎監訳）『認知心理学と人間の情報処理Ⅲ』（一九八八年）六五七頁以下参照。

- (15) 大田信夫編『エピソード記憶』（一九八八年）、コーン/アイゼンク/ルボワ（認知科学研究会訳）『記憶』（一九八九年）四三頁以下参照。

- (16) クラツキー、前掲書Ⅱ、三二三頁以下参照。vgl. Wexler, Sprache Gedächtnis Verstehen, 1976, S. 37 ff.

- (17) *Pavio*, Mental imagery in associative learning and memory, Psychological Review 76 (1969), 241-263; *Pavio/Csabo*, Picture superiority in free recall: Imagery or dual coding?, Cognitive Psychology 5 (1973), 176-206. クラツキー、前掲書Ⅱ、三五四頁以下、梅村智恵子「記憶とイメージ」現代基礎心理学四、一二六頁以下、高野守正「認知の構造」（一九八二年）一四七頁以下、宮崎清孝（水島軽一、上杉喬編）『イメージの心理学』（一九八三年）一六〇頁以下、アンダーソン、前掲書、九八頁以下、レアー（海保博之）『メンタルモデル』（一九八八年）一七三頁以下、R・ラックマ

ン／J・L・ラックマン／バターフィールド、前掲書Ⅱ、三七四頁以下参照。

- (18) *Pylsghyn*, What the mind's eye tells the mind's brain: A critique of mental imagery, *Psychological Bulletin* 80 (1973) 1-24; *Pylsghyn*, The imagery debate: Analogue media versus tacit knowledge, *Psychological Review* 88 (1981) 16-45. ヒリシン(佐伯胖監訳、信原幸弘訳)『認知科学の計算理論』(一九八八年)二八三頁以下参照。ピリシンによれば、イメージにハ絵のようなものVが付随することまで否定されるのではなく、より本質的なことは、われわれが保持している知識、しかも言語によっても表現できないような「暗黙知」(tacit knowledge)がイメージを持つ際に介入し、意味的な処理を行なっているという点が重要となる。

- (19) 「命題」は、記述される事象に直接対応しない抽象的なものであるという点では言語に対応するが言語そのものではない。それは、言語の場合における意味に対応しているが、言語では表現できない知識をも扱う。そして言語を理解した結果として有する意味も心においては命題記述の形で存在しており、したがって言語とイメージは相互に翻訳可能である、ということになる。宮崎清孝、前掲論文、一六五—一六六頁参照。

- (20) ハイメージ派Vもハ絵のようなものVの背後に知識や意味によって処理されるものを認めるようになってきている。*Kosslyn*, The medium and the message in mental imagery: A theory, *Psychological Review* 88 (1981), 46-66. クラツキ、前掲書Ⅱ、三五七頁参照。なお、イメージを知覚の「予期図式」としてとらえる見解について、ナイサー(古崎敬、村瀬晏訳)『認知の構図』(一九七八年)一三六頁以下参照。

- (21) パンデモニウムモデルについては、ルーメルハート、前掲書、五六頁以下、リンゼイ／ノーマン、前掲書Ⅱ、四頁以下、クラツキ、前掲書Ⅰ、一〇一頁以下、ナイサー、前掲書、九〇頁以下参照。

- (22) カントにまで遡る「スキーマ」(シェーマ、図式)とは、認知活動を処理するための一般的・抽象的な知識の構造体であるが、対象についての必要十分条件の集合ではなく、否定する根拠がない限りで仮定される性質、すなわちハデフォールト的V性質、典型的性質に関わるものとして理解されるべきである。ミンスキーが「フレーム」と呼ぶものもこれにほぼ対応している。また「スクリプト」と呼ばれるものは、出来事がルーチン化されたパターンをたどる傾向があるが、そうした傾向についての予期的な知識の単位を意味している。例えば、レストランに行けば、ウェイターがメニューを持ってきて、注文をとり、料理が出され、食事をし、代金を払うといった出来事の進行を予測できる。このような出来事(エピソード)についての知識の統合体がスクリプトである。ノーマン(富田達彦訳)『認知心理学入門』(一九八四年)七七頁以下、ミン

キー(白井良明、杉原厚吉訳)「知識を表現するための枠組」(ウインストン編『コンピュータビジョンの心理』一九七九年)二三七頁以下、同(佐伯胖編)『認知科学の基底』(一九八六年)八頁以下、戸田正直、阿部純一、桃内佳雄、往来彰文『認知科学入門』(一九八六年)一一九頁以下、伊藤正男・佐伯胖編『認識し行動する脳』(一九八九年)一七頁以下参照。

(23) クラツキーも、「仮説は認知されるべきパターンが感覚登録器に入る前でも影響を受ける」と述べ、「例えば、新しい視覚対象をひろいあげる眼球運動は、その直前の凝視中に認知された情報によって誘導される」ということを指摘している。クラツキー、前掲書I、一一三—一四頁参照。

(24) ことば(日常言語)のイメージ性については、中村雄二郎『哲学の現在』(一九七七年)六五頁以下、同『共通感覚論』(一九七九年)一三九頁以下参照。またイメージによる対象の同定という観念に対する批判として、エイヤー『哲学の中心問題』八八頁以下参照。

(25) 指示概念と錯誤の問題については、増田「使用規則の錯誤と指示対象の錯誤—錯誤問題への意味理論的アプローチ」四七三頁以下参照。

(26) Vgl. Kuhlén, Die Unterscheidung von vorsatzausschließendem und nichtvorsatzausschließendem Irrtum, S. 441.

エピソード

以上の考察から、刑法における故意の認知形式および錯誤問題に関して得られた主要な結論を次のように総括的に確認しておこう。

1. 故意帰責にとつては、責任主義および行動規範に対応する言語との関わりを有し、「自己意識」(反省意識)を伴いうる認知が必要とされる。その際、前言語的な要因が認知に深く関わっているということは決して否定されるものではない。つまり、イメージによる対象の同定ということが認められるにせよ、そうした同定に言葉を

対応させていることが故意帰責にとっては必要である。

2. 故意における認知は、「素朴实在論」の意味において物的対象を直接的に知覚することではなく、また「感覚与件論」の意味において裸の、意味を欠いたデータを知覚するものではない。むしろそれは意味を知覚することであり、理論・概念負荷的な知覚であり、 \wedge ことを見る \vee を含んだ \wedge として見る \vee としての知覚である。

3. しかし理論・概念が一方的に知覚を決定するものではなく、「トップダウン的处理」(概念駆動的处理)と「ボトムアップ的处理」(データ駆動的处理)との相互作用を通じて知覚が実現される。

4. いずれにせよ、 \wedge 純粹な \vee 事実の感覚的知覚と意味の精神的理解とを厳格に区別することも、またそうした基準に従って \wedge 記述的 \vee 構成要件要素と \wedge 規範的 \vee 構成要件要素とを区別することも否定される。

5. さらに錯誤を客観的な実在と主観的な認識との不一致とする、通俗的なテーゼも退けられ、対象レベルで見ると、錯誤はむしろ相互主観的に適用されるべき意味を行為者が適用していない場合、あるいは基準となる相互主観的な意味を行為者が理解していないか、そうした意味と行為者の理解している意味との間に不一致が生じている場合に認められる。

6. 故意における認知にとって事後に成立する結果も、また行為後の因果の経過もその対象ではありえない。したがって、事後に成立する結果や行為後の因果の経過によって故意そのものが阻却されることもない。

7. 行為者は通常、厳密に定義された内包により外延を規定するというような論理的操作によって対象を同定するのではない。むしろかれの脳に知識として蓄えられたプロトタイプのスキーマと感覚情報とを近似的に照合することによって同定の課題を実現するものと仮定しうる。

8. 概念が階層的構造を成している場合、ロッシュの研究によれば、人はまず「基礎水準」と呼ばれる中間段階の

概念によって対象を同定する。そこで立法者が法規に抽象的な上位概念を使用したとしても、普通の人間である行為者に上位概念による対象の同定を期待することは無理であり、イメージ性の豊かな具象的な概念によって対象をとらえていれば原則的には故意を認めて差し支えないものと考えられる。つまり、行為者に故意を認めるためには、構成要件（構成要件要素）によって指示された対象（指示対象）をかれが使いこなせる具象的な日常的概念を通じてとらえていけばよいことになる。

9. しかし立法者が構成要件の表現の内容充足を、他の法領域の規則や社会倫理上の規則あるいは科学的な規則に動態的に委ねていると考えられるときは特殊な意味の認知が要求されることも考えられる。

10 パラレル評価の理論をいかに理解するかはともかく、有権的な意味と社会的意味（日常言語の意味）とがパラレルに対応していない場合にはこうした理論は挫折することになるであろう。